明治四十年十月二十日發行

（明治二十年十一月本會創立）

婦人衞生雜誌

第二百十五號

第三種郵便物認可 明治廿六年四月四日
毎月一回二十日發行
內務省許可 明治二十一年三月二十八日

私立大日本婦人衞生會

婦人衛生雜誌

第貳百拾五號目次

大日本婦人衛生會

十一月例會通知

來る十一月二日（第一土曜日）午後一時半より神田區一ツ橋通り女子職業學校内に於て例會を開き左の講話有之候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會被下度候也

一演題未定　醫學博士　横手千代之助君

一身體及び其保護（續）　ドクトル　富士川　游君

明治四十年十月

私立大日本婦人衛生會

會告

本會は今回振替貯金に加入致し候に就ては會費拂込みの節は何處の郵便局にても送金は總て無料にて取扱ひ申候、本會の振替貯金口座番號は一〇六〇〇番に付右番號御承知の上所在の郵便局に於て該用紙御請取被下指定の欄内へ送金高、拂込人住所氏名、及び加入者住所氏名(即ち本會)等を記入し同時に金円御拂込相成候はゞ直に本會へ送金無料にて相屆き且つ途中紛失及び盗難の憂ひも無之候又該用紙裏面に通信文欄有之候間他に用事ある節は何なりとも御記入差支無之候右の如く拂込人に取りては安全、輕便、經濟等一擧にして種々の利益ある便法に付自今該法を御利用被成下度此段會員諸姉に稟告致候也

○九月發行の本誌には會員諸姉の御便宜を謀り振替貯金拂込用紙を添付致置候間そを御用ひ被下度候

明治四十年十月二十日

私立大日本婦人衞生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならすや智識を開き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんと皆ともに願はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んこといと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〱衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改革育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして許吾等婦人のもつはら學ぶべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相繼て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは實に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ談り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ每月一同集合を開き學識經驗ある人々に衛生上階般の諸般演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を解記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を叙べて廣く江湖の諸愛姉に告け其贊成を仰ふぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の衛生を増進するにあり

●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三條　本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

●第四條　入會の者は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員證を交付す（交付手續は末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす

●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得

●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず

●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす

●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二雜誌出版、第三庶務とす

●第十三條　臨時指名委員の作

●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中[illegible]員を生ずるときは次點者を以て補缺す

●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す

●第十六條　集會は例會總會[illegible]評議員會とす例會は八九月を除くの外每月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二[illegible]員相互親睦の爲め觀遊會を開くことあるべし

●第十七條　本會學識[illegible]ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員をして随意聽講せし[illegible]ものとす

●第十八條　會員は親族の婦女若くは知己の婦人を本會々[illegible]誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（衣服は總て質素たるべき事）

●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁ず

●第二十條　規則の改正[illegible]他亟要の件議定のこと

●第廿一條　每年三月總會に於て會計の收支決[illegible]並に庶務の概要會員の増減等を報告すべし

●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす

●第廿四條　會計は一ヶ年每に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會

●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし[illegible]後員の増減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす

●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其代價を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を購求する者に就きて[illegible]同じ

●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●雜件[illegible]

三十條　本會は每月一回雜誌を發刊し之を會員に配付すべし

●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄附する者あるときは本會々長の名を以て謝狀を贈り寄附者の姓名及品目を雜誌に登錄し尚本會雜誌を以て報告すべし

●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送付として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割増）

●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（牛込築土八幡町郵便取扱所宛）振出しあるべし

●第卅四條　會員中若し本會の障害となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

事務所　東京市牛込區上宮比町八番地　私立大日本婦人衛生會

○役員姓名

東伏見宮依仁親王妃
總裁 周子殿下
會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 男爵夫人 瀨尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
仝 羽田三緒子
仝 岡田德子
仝 高木かう子
仝 山本多穗子
仝 松平芳子
仝 三浦數子
仝 石川貞子
仝 岩下ゆか子
仝 濱田捨子
評議員 長谷川仲子
仝 仁禮壽賀子
仝 四升子
仝 穗積歌子
仝 土肥多越子
仝 緒方悅子
仝 岡山とし子
仝 小川孝子
仝 男爵夫人 加藤鈴子
仝 片山龜子
仝 吉武錦枝子
仝 丹波貞子
仝 高橋孝子
仝 田村きよ子
仝 男爵夫人 南部限子
仝 中濱芳子

評議員 子爵夫人 山口貞子
仝 松井正子
仝 岸延子
仝 三宅藤子
仝 宮本樂子
仝 宮下咲子

●支會 千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別賛成員

（●は本會の爲め講演又は執筆せられし諸氏）

醫學博士 ●入澤達吉君
理學博士 ●飯島魁君
ドクトル ●伊澤信平君
●色川圀士君
藥學博士 ●伊東祐彥君
ドクトル ●飯盛挺造君
醫學博士 ●伊藤隼三君
理學博士 ●石川千代松君
日本赤十字社醫長 ●岩井禎造君
醫學博士 ●石原久君
醫學博士 ●野瀨雄一君
醫學博士 ●石原喜久太郎君
貴族院議員 濱尾新君
醫學博士 ●濱田玄達君
法學博士 ●鳩山和夫君
東京 荻原彌四郎君
醫學博士 ●芳賀榮二郎君
長谷川泰君
新潟 ●長谷川一詮君
小兒科 ●小原賴之君
醫學博士 ●岡田榮吉君
醫學博士 ●林春雄君
醫學博士 ●佐藤達次郎君
醫學博士 ●緒方正規君
步兵中佐 ●堀內文次郎君
醫學博士 ●土肥慶藏君
醫學博士 ●岡田和一郎君

醫學博士 ●大澤謙二君
醫學士 大西秀治君
醫學博士 ●大澤岳太郎君
一等藥劑官 ●恩田重信君
醫學士 ●若杉喜三郎君
醫學士 ●渡邊乃吉君
男爵 ●加藤弘之君
醫學博士 ●加藤照麿君
醫學士 ●賀古鶴所君
醫學博士 ●河本重次郎君
醫學博士 ●片山國嘉君
醫學士 ●川上雅紀君
醫學士 ●櫻田龜一郎君
醫學博士 ●金杉英五郎君
醫學士 ●笠原光興君
醫學士 ●唐澤光德君
醫學士 河野衛君
醫學博士 ●高橋順太郎君
ドクトル ●高山紀齋君
醫學博士 ●高木兼寛君
法學博士 ●高木豐三君
醫學博士 ●田代義德君
新潟 ●田代亮助君
男爵 高崎正風君
醫學士 ●竹中成憲君
醫學士 ●高山耕安君
貴族院議員 ●高橋辰五郎君
藥學博士 ●丹波敬三君
醫學士 高橋貞須君
藥學博士 田原良純君
醫學士 ●田村光顯君
醫學士 ●久保猪之吉君
醫學士 ●米山彥郎君
二等軍醫正 ●尾野寶光君
醫學士 ●宮本叔君
三等軍醫正 ●橫井忠閲君
大日本教育會長 辻新次君
理學博士 ●坪井正五郎君
醫學博士 ●長與稱吉君
男爵 南部甕男君

理學博士 ●長井長義君
醫學博士 ●遠山椿吉君
醫學博士 ●中濱東一郎君
醫學士 ●黑山玄通君
醫學士 ●栗本庸勝君
海軍中佐 ●小笠原長生君
醫學士 村松組三君
醫學博士 ●瀨川宗雄君
醫學博士 ●栗本東明君
醫學士 ●山山致三君
醫學士 ●山田弘倫君
醫學士 ●山根正次君
岡山 山川春二君
衛生試驗所技手 ●丸山是四郎君
ドクトル 松山陽太郎君
ドクトル ●小此木信六郎君
盲啞學校長 ●小西信八君
廣島 小泉賀君
醫學士 ●古川榮君
東京 布施正顯君
南滿洲鐵道會社總裁 ●後藤新平君
元帝國大學教授 ●エ、ベルツ君
醫學士 ●中野樂君
文部省書記官 ●寺田勇吉君
醫學士 ●寺田門作君
醫學士 ●寺田織尾君
子爵 秋元興朝君
前軍醫總監 ●足立寛君
ドクトル ●新井古芳君
ドクトル ●富士川游君
高崎醫會長 土谷全次君
産科婦人科 ●水原漸君
ドクトル ●久保田誠曆君
醫學博士 ●佐々木政吉君
醫學士 ●淺田次君
醫學博士 ●朝倉文三君
ドクトル ●朝山雄六君
醫學博士 ●晋要勝剛君
醫學博士 佐藤三吉君
醫學士 ●櫻井郁二郎君

ドクトル ●佐伯理一郎君
醫學博士 ●榊順次郎君
醫學博士 ●榊保三郎君
醫學士 ●佐藤得次郎君
醫學博士 ●[illegible]井銳次君
醫學博士 ●[illegible]澤緒道君
醫學士 ●北村[illegible]君
醫學博士 ●北島多一君
ドクトル ●北川乙二郎君
醫學博士 ●木下正中君
醫學士 ●北島小太郎君
醫學博士 ●北里柴三郎君
醫學博士 ●三浦守治君
醫學博士 ●三浦謹之助君
小兒科專門 ●宮本仲君
理學博士 ●箕作佳吉君
醫學博士 ●三島通良君
醫學博士 ●三宅秀君
醫學博士 三[illegible]信太郎君
伯爵 土方久元君
醫學士 ●島村俊一君
醫學博士 ●弘田長君
ドクトル ●日高昂君
ドクトル ●須山卓爾君
醫學士 ●澄川德君
醫學博士 ●木村德衛君
醫學博士 森林太郎君
醫學士 ●笹川三男三君
醫學士 ●波多野傳三君
醫學博士 ●奧秀三君
ミス ●リツデル
ミス ●ヒユース
ミセツス ●コーツ
ドクトル ●菊池循一君
醫學士 ●橋本左武郎君
醫學士 ●鳥居春洋君
ドクトル ●土田卯三郎君
ドクトル ●佐藤逖雄君
ドクトル ●西山信光君
醫學士 ●澤寛制君



十六世紀に於ける西洋浴場の狀況

婦人衛生雜誌第二百十五號
（明治四十年十月二十日發行）



飲酒問題と婦人との關係

醫學博士　片山國嘉君講演

今日は此席上に於て一場の講話を致すの榮を得ました、其題は飲酒問題と婦人との關係と致して置きました。

酒と婦人との關係と申しますと、寔に縁の遠い問題のやうに或はお考へになるかも知れぬと存じますが、能く御考に成りますと決して縁の遠いものでない、唯關係が直接でなくして間接であるのみのことてございます、今日歐洲に參つて見まするると、婦人が餘程此飲酒問題に注意を致しまして、或は酒害豫防を目的とする婦人の團體も出來て居り、社會に於ける酒の害を防ぐ爲には婦人も一臂の力を假さなければならぬ、是は婦人の義務であると云ふやうな意氣込てございまして、中々盛んであります、此酒の害を防ぐのに一番有力のものは何であるかと云ふに、宗教家の說教でもなく、又學者の話でもない、私の考では各國人口の半を占むる婦人の力と、未來の國民なる靑年少女の力、此二つの力が酒の害を防ぐに一番有力なるものと信じて居るのてあります。

それ故に今日飲酒問題と婦人との關係と云ふ題を掲げた次第でございます、餘り學術に立入つたことは却て御迷惑と考へますから極く通俗のことの外申上げぬことに致します。

先づ酒と云ふものは如何なる國でも飲まぬ所はありませぬ、或は未開野蠻の處に於て酒の無い處がありましても一度酒を輸入して其味を覺へますると皆

な好んで酒を飲む、是が爲に野蠻人種は段々に其種族が減少して遂には人種の滅亡に向ひつゝあると云ふ有樣であります。

酒は必要なものであるや否やと云ふに、宴會の時には酒は必ず附物であります、祝ひの席にも酒が出る、お祭りのときには御神酒が入用であります、此の如く社會の風俗上酒は必要なものではあります、併し衞生上必要なものではない、新聞の廣告などを見ますと、葡萄酒は胃を強くするとか何とか色々の効能を述べ立てゝ大層身體の爲めに宜いやうに出てありますが、段々學者の研究したる所の結果に依て見ますると左程効能のあるものではない飲まぬは飲むに優ることは疑もない事實であります、人類の爲には酒は無い方が宜いのです。

西洋では麥酒のことを液體の麪包であると申して麥酒を麪包同樣の滋養物のやうに申傳へて居りますが、果してさうであるや否やと云ふに成程麥酒の中には多少の滋養分は含んで居るに相違はありませんそれも之を小麥の粉に比較すると、小刀の先て少しく抄つた位の麥の粉と、コップに一杯の麥酒と滋養の量は同じ位でありますから團子一串だけの滋養分を麥酒で取らうとすると麥酒の半ダース位は飲まずばなりますまい、よしんば價は問はずビールでそれだけ滋養分を取るにしても之と同時に澤山のアルコールを飲のでありますから、其利害を篤と考ねばならぬ事である、寧ろ團子の無害にして而も安全なるを取ることと智者の行爲であらうと思ふ、兎に角此の如き次第でありますからビールは液體のパンだ等と稱贊する程の價値はないものであります、其外の酒には殆ど全く滋養分は含まれて居無いのであります、次にアルコール其物には滋養の効があるや否やと云ふに是は無いのであります、酒を飲むと呼吸が早くなる、心臟の働きが早くなる、斯の如く心臟の働きや呼吸の上に影響するのは是れ心臟や肺臟の働きを助ける酒の効能のやうに考へる人もありますが、決してそうではない、是は無益に呼吸を早くし

又無益に心臓を早く働かするので一向に必要の無いことであります、上戸は兎に角下戸は苦い思ひをするだけが損、決して心臓の爲になり肺臓の爲になるとか云ふことはないのであります。

寒いから一杯飲まうと云ふことは常に酒を飲む人の申すことでございますが、是は實際身體が温かくなるのであるか、即ち温度を增すのであるかと云ふと事實は反對で、酒を飲んで體温が增すと云ふのではなくして多く飲めば却て減る、少量の時は夫程の影響はございませぬが、兎に角、體温の增すことはないのに寒さ凌ぎの爲めに好んで酒を飲むのはどう云ふ理屈てあると不審に思ふ人もある、此不審は一理あることにて、成程酒を飲めば一時は温かく感ずる、是は皮膚の血管が變つて來るのであります、常には蒼い冷たい顔の人でも酒を飲むと顔が赤く且つ温かくなる、寒い時には皮膚の血管が狹く成る、狹くなれば血が少くなる、それで皮膚の色が蒼白くなるが酒を飲むと血管が擴くなる、血管が廣くなれば血が多く其處へ這入て來る、そこで皮膚が赤くもなり又温かくも感ずるのであります、斯く血管の廣くなるのはアルコールの働きであります、血管の廣くなるのは即ち麻痺するのでありますから假令一時皮膚が温かく感じても實際體温が增すのではない、身體の内部にある血が表面の方へ來る丈のことであります、多量に酒を飲めば飲まないより體温の減るのは何う云ふ譯であるかと云ふと、皮膚に血が多く注いて來ると此皮膚の外面より温度を空氣中へ放散する其結果は即ち體温の減少となるのであります、大酒した後寒暖計て計つて見ると、體温の往々飲まない時より減つて居るのは此譯てす、暖國の者は存じませぬが寒國に住つて居る者は此事を能く承知して居ります、日本でも北國の人は承知して居りまして、大雪の降る頃に酒を飲んで外へ出るのは危險であると云つて居る、是は實際危險であります、飲まないでも雪の中に埋められて凍へ死する者は往々ある、が殊に飲酒家に凍死の多いのは酒を飲んだ爲めに體

濕の放散減少するからであります、西比利亞、露西亞、何處へ往つても北國の人民はよく此寒中飮酒の危險を知つて居ります、酒を飮んで轉寐をすると風を引き易いのも同じ道理であります、斯う云ふ譯で酒を飮んで溫を增すと云ふことは實際に於て無いことで、そう思ふのは全く酒にだまされて居るので、疲れて居る時に酒を飮むと一時仕事が又出來るやうになる、是も力が增すのではない、力の增したやうな感じがするのみてある、實際は酒を飮むと總て感じが鈍くなる、即ち痲痺するのであります、勞働者が疲れた時に酒を飮むと其疲れの感じが鈍つて來るから疲れて居ても其感じを覺えなくなるから仕事をしても一時は其疲れを感覺せずして實は無理な仕事が出來るのであるが、疲れとは元來身體の使ひ方が度に過ぎたと云ふことの信號てありますから其以上無理に使へば身體の害になるは當然てある、其疲れのあるにも拘らず酒の爲めに感覺が鈍くなるので、身體に害あることには氣が付かずして十五分か二十分間は、無理にも働けますがそれより以上の時間を經過すると、今度は前の疲れに數倍した疲れを覺へて來るのであります、試驗をした結果酒を飮んで力量の增すことは實際に於て毛頭無いと云ふことが證據立てられてあるのであります。

斯の如く種々に研究を致して見ますると、酒を飮むことには何の利益も無いことは明なのであります、それにも拘らず酒を好んで飮む人の多いのは何が故であらうと云ふ疑問が人々の腦裡に起ります、それは味の善こと及ひ口より咽喉を通つて胃に這入つて往くまでの間に何とも云へぬ好い感じがするからであります、上戶の口には下戶の知らぬ好い味がする、味と云ふよりは寧ろ一種の刺戟であります、それから後には多少醉つて來る、其醉の初に於ては極めて精神が爽快になります。精神が爽になつた時の快感と、此快感と彼の刺戟、此二つのものが酒客の忘れんと欲して忘るゝことの出來ぬ魔力を有して居るのであります、世人をまみするアルコールの怪

力は此二つの外には無いのでありますから酒は決して必要物であるとは申されぬのであります。

さう云ふことが段々明かになりましたから、獨逸などに於きましては以前は兵營の中に兵士の飲料として必ず酒が備へてあつたものであるが、獨逸皇帝は之は必要物でないことをお感じになつて、軍隊に給與し來りたる酒を廢しその代りに將來珈琲を用ひよと云ふ勅命がありました、それ以來獨逸の兵營には酒を備へることは廢しになつた、是は今より三十年も前の話であります、獨逸帝は斯の如き點に迄深き注意を拂つて居られます、兎に角酒は人生に必要な物で無いと云ふことは明白なる事實であります。

それでは如何に少量と雖も害であるか毒であるかと云ひますと、決してさうではないのであります、例へばアルコール漬け又は粕漬の食物位のものは召上つても決して害にはならぬ、然らば何の位以上は可かぬ、何の位迄は宜いかと云ふことは酒を飲む人から往々問かれることでありますが其分量は極めて申すことは出來ませぬ、其極められぬ理由は人に依て感じが大變に違ひます、即ち一升飲んでも平氣な人もあり、小さい盃に一盃飲んでも眞赤な顔をして苦しむ人もある、人に依て大變に感じが違ひますから、幾ら以下は宜い幾ら以上は惡いと云ふことを極めることは不可能であると、お答するのが眞に正直な答であります、西洋の書物に於てもアルコールの飲量五瓦迄は宜い、或は十五瓦、多いのは三十瓦迄は宜い等と色々に書いてあります、是は人々に依て違ひますので三十瓦で宜い人もありますが又十五瓦でも多過る人もあるのであります、決して一樣には申されぬのであります、世の中に徹頭徹尾毒であると云ふ物は一つも無いのであります、どんな激しい毒でも少量ならば決して毒にはなりませぬ、先づ毒物の中で青酸と云へば猛毒の一つである、青酸瓦斯を嗅げば直に卒倒する、それ位毒性の強いものでも水に溶して淡くすると藥となる、咳の出る時之を止める藥には青酸を含んで居る藥品を日常用ひて居りま

す、多量に飲めば毒になるが少量では毒には決してなりませぬ、アルコールの毒も其通りで人々に依て分量に相違がある、それでは自分は酒に強いから澤山飲んでも宜いかと云ふに、夫は大間違である、如何に抵抗力の強い人でも澤山酒を飲めば遂ひには害を蒙むるやうになる、強いからと云うて澤山飲んでは矢張可けないのであります、弱い人の飲む酒は尚更可くない、少し飲んでも頭痛がする、寒氣がする、眩暈がして起きては居られぬと云ふ、斯う云ふ人は酒に對する抵抗力が弱いのでありますから少量の酒を飲んでも既に中毒を來たします、それであるから下戸に酒を勸めると云ふことは好い欵待ではなく、其人に毒となるものを强ひるのでありますから甚だ宜しくないことであります、さう云ふ酒害の實況を知らずして宴會の席などで私がお酌をしますから今晩は是非御飲み下さい等と辭巧に酒を强ゆるのを以て最上の欵待と心得て居る人もありますが、是は實に愚な人であります。

酒の害にも色々ありますが、之を大別致しますと凡そ二通りになります、一は直接の害、二は間接の害であります間接の害と云ふのは遠廻しに來る害であります、例へば酒の爲に種々の病氣に對する抵抗力が弱くなる、さうすると又その病氣に罹り易くなるから酒客は肺病にも心臟病にも腦病にも何病にも多く罹るのである、之が間接の害であります、其害の急に現はるゝ時即ち急性中毒の時には誰にでも氣が付きますが慢性の中毒とか間接の害には人が氣付かずに居ることが多いが始終酒を飲んで居りますと其結果として氣質が幾分か變つて來ます、遂には溫厚な忍耐强い人も癇癪持になり、人々の約束に背いても氣にせぬと云ふやうになるのはアルコール中毒の始めであります。所謂酒客氣質と云ふのは即ち是です。

又胃が惡い、腸が惡い、手足が痛む振ふ、斯う云ふことになつて來れば是は皆酒の中毒が現はれて來たので之が慢性のアルコールの中毒であります併し

此中毒は早く氣が付いて適當な治療をすれば大抵は癒ります、然しアルコール中毒の起つて居るにも拘はらず尚續けて酒を飲むと、遂には不治の不具者となるのみならず、生命等も之が爲に餘程短くなる事は明かであります、殊に其點に至りましては、アルコールの直接の害よりも間接の害が恐しいのであります、最近の酒毒研究の進歩の實況を知らぬ人は醫者であつても其間接の害がそれ程著しいと云ふことを知らずに居る人がある、さう云ふ人に酒のことを聞きますと、ナーニ少位は宜いと云つて酒の害を左程氣にせぬ人が醫者の中にも澤山あります、それでありますから一般の人々に於てさう云ふ考への多いと云ふことは實に止むを得ぬことではありますが此間接の害は極めて恐ろしいものであります、から世人の一般に大に注意すべきことであります是迄新聞などに虎列刺が流行するとか赤痢が流行すると云ふ時にはその豫防に葡萄酒がよい等と云ふ廣告を見たこともあるが、是は全くの正反對で酒を飲めばコレラにも赤痢にもペストにも罹り易くなり又外の病氣にも罹り易くなるので防ぐと招ぐとの相違があります、肺結核に罹る者及び其死亡數は共に酒を飲む人に多い、此は統計表に依て疑ふ可らざる事實でありますます然るに少し肺病の氣味であると滋養の爲に毎日葡萄酒を飲むなど丶云ふ人が未だ中々多くあるやうだが此等の人は氣の毒なことには肺病を豫防する積りで實は招いて居るものであります、酒を飲むと中風に罹ると、云ふことは素人でも知つて居る、あれは腦の血管が酒の爲に惡くなつた結果である、血管は護謨のやうな彈力のある柔かなものでありますが屢々酒を飲むと追々に剛くなり、終ひには古護謨か竹筒のやうになつて來るさう云ふ血管は寔に裂け易いから、腦の血壓が少しく高くなると容易く此血管が破れて血が出るのであります、是れ即ち飲酒が中風の下地を作る所以であります此間接の害は世人も多少氣が付いて居る、やうであるけれども肺結核が飲酒に多い、心臓病、精神病もさうであると云ふこと

とには未だ世人の注意が少いやうである生命保險會社などは最も能く斯う云ふことを知つて居らなければなりませぬ。

近頃に保險會社の最も恐れるものは酒であると云ふことに氣が付き掛つたやうである兎に角飲酒と死亡數との間には世人の豫想なる大關係のあるものであると云ふことが追々明瞭に成るに從つて保險會社は是迄酒の爲に大變多くの保險金を拂はされて居たと云ふことが分つて來たのであります。

婦人方乳の出方の減ずるのも亦間接の酒害の一つて歐羅巴では婦人も葡萄酒やビールを飲むものが多い其中で偶に酒を飲む者、常に少量を飲む者、常に稍多く酒を飲む者及び常に大量を飲む者と此四通りに區別すると、偶に飲む者には乳の出るのが多い、乳の出ない者は少數である、それから常に少量を飲む者と偶に飲む者とを比較すると偶に飲む者の方に乳がよく出る、それから常に稍多量を飲む者と大量を飲む者、此二者には乳の出ない者が多い。又本人は飲まずとも親が大酒家であれば其子の乳の出方が少い、從て自らの乳で子を育つることの出來ぬものが多くなるのであります。

酒害の子孫に及ぼす所の影響、是は實に意外に大なるものである、千八百六十四年は葡萄の豊年であつた葡萄の能く出來た年には葡萄酒も澤山に出來る從て葡萄酒が頗る廉いから、自然に多くの人が澤山に之を飲みました、處が其年に出來た子供はどうも他の年に出來た子供よりは精神が鈍い、身體が弱い何しても健全でない子供が多い、此年に生れた子供が學校に往くやうになつてから、學校の先生が何う云ふもんか今年の生徒は成績が皆んな惡い、不思議だと云ふので段々調べて見ると、丁度其子供の出來たのは六十四年で諸人が澤山葡萄酒を飲んだ年で親の飲酒が子に報いた其結果が數年の後に其子供の精神發育上にさう云ふ影響を來たしたと云ふことが分つたのであります、それから智惠の足らぬ子供のことを「あれは六十四年生」かと云ふやうに一種の流

行語が出來ました、六十四年生と云へば乃ち智惠の足らぬ子供と云ふことになります、今一層確實なことは白痴院にて、統計的に依て調べて見ますと親の飲酒と白痴との關係がよく分ります白痴は飲酒家の子に多い、計りでなく孫にも多い即ち二代三代或は四代の後まで其影響を及ぼすのであります。

酒客の家族に付て、其の子供に及ぼす影響を調べますと、彼の家族に較べて神經衰弱が多い、又癲癇が多い、是も飲酒の間接の害で、飲む本人は酒を樂みに飲んで人に害を及ぼさないと考へて居つても、其害は此の如く遠く子孫に及ぶのでありますから此事に氣が付いたならば何人も酒を飲むに就ても又之を人に飲ますにしても餘程考へを要することであります、此關係は唯だ其家族だけでなくして廣く社會に行渡つて來ますと、是が社會の不健康の原因となる又此不健康なる社會が集つて國を成せば其國の不健康も亦推知するに足るものであります、其影響は兵力の上にも又一國の生産力の上にも及ぶ國家の一大事であります不具な子供や精神の鈍い子供は一人前の働きが出來ませぬから一人で數人位の手間を潰す頭數が多くあつてもそれ丈は又生産的の人で即ち國力を弱くする人であります、初めは些細のやうでも一杯一杯又一杯と積る盃の數々が、遠く及ぼす影響を見ますと實に恐るべく驚くべき重大な影響であります。

酒害の著大なることは上來述べ來りたる如くてありますから吾人は吾が日本國民の飲酒上に大に警戒を加へて其害の未だ著大ならざる間に之を豫防する方法をよく講究しなければならないことゝ思ひます歐羅巴や、亞米利加では既にその害の著しかつた爲に酒害を豫防することに今日は識者が非常に熱心に盡力致して居ります。婦人の熱心も亦盛んなものであります。

日本では婦人は餘り酒は飲まぬ是は眞に美風であります、が海外へ往つて居る婦人の中には一二杯の葡萄酒を平氣で飲み得る人もあつたやうだが是は即

ち歐羅巴風に惡化したので決して善いことてはないのてあります、さう云ふ人が日本に多く成つて來ると古來の美風を破ることの患がある希はくは歐羅巴の婦人をして日本の此不飲酒の美風を眞似させたいものてはありませんか歐羅巴ては今日其風の惡いことに氣が付いて心有る人々が其弊を矯めやうと盡力して居る時てあります是迄の習慣てすから酒は出してはありますが、決して無理に勸めは致しませぬ、私は酒を飲みませぬと云へば直に他の飲物をついで呉れますさう云ふ工合に歐羅巴ては飲酒の風俗改良に努めて居ります

　底て私が御一同に希望するのは先づ第一に將來の日本國民となる所の青年には成る丈飲酒の習慣の付かぬやう御心配あらんことを希望致します、是は男子の力よりは婦人の力に依頼する方が有効てあらうと思ふ、第二に婦人は人口の上から云つても五千萬人中の約半分は婦人が占めて居りますし殊に家庭の實力は男子よりも婦人の方に多くありますから其婦人が單に我子のとのみ思はず是が同時に未見の日本國民を飲酒の惡習慣を救濟する一大社會事業である國家に最も有益なる風俗改良の實行であると云ふことに御考あらんことを切に希望致します。

　私は酒の利害に付ては豫てより深く感じて居ります、故に今度西洋へ參つても酒害豫防のことに付ては比較的に多く見て參りました、書物なども獨逸語て書いたものは殆ど有だけ取つて來ましたから、今後も酒の利害のことに付ては及ばずながら社會の爲め國家の爲めに努力する積りてありますが私は主として御婦人方と青年少女とに最も望を屬して居る次第てありますから何うか飲酒の風俗を改良し實行するに付ては皆樣の協同一致の御盡力を願ひたいのであります、私は四五年前大學の通俗講談會て酒に付て一場の講話を致しましたことがありますが、其影響は意外に著大てありまして思はぬ所から感謝狀等が澤山參りました、此頃も岡山の監獄から私の演説筆記の摺物を囚徒に見せたらそれが、大層役に立つ

たと云ふ禮狀が來ました、何は兎もあれ角もあれ、何とかして將來の日本國民をして此の酒害より免がれしめたいと云ふのが私の希望でありますから又他日機會がありましたならば申上げることに致します、今日は餘り長くなりますから此位に致して置きます。

叢談

肉食と草食

醫學士 渡邊房吉君

○肉食と草食と、どちらが人類の健康に良いかと云ふことに就ては、古來學者の論爭の絶へ間ないところて、或者は絶對的く肉食說に贊成し、又或者は飽くまても草食說を主張して居ります

○植物を常食として居るものには、頭腦明快にして遠慮深謀ある思想家が多いと云ふものもあるし、又反對に肉食者てなければ、國家の大事を托すべき大人物大豪傑は到底出るものてないと推論するものもありますが、何れも己れの好むところと慣るゝ所とを標準として、偏頗な說をなして居ります

○サレバ大方肉食說は傾いて居つた天下の大勢も、歷史上の大事實として特筆大書すべき赫々たる日露の戰爭て、草食民たる日本人が見ん事露國人を打ち負かしたので、搖ら〳〵と搖らぎ始めて遂にさしもの肉食說も、鼎の輕重を問はれるやうになり、多年日本に居つて醫學界に大に貢献するところのあつたベルッさんの如きは、眞つ先き掛けて肉食說に一本鎗を入れました

○歐米諸國ては日常の食料として盛に獸肉が用ひられ、甚しきに至りては一回ても之を食はないことがあれば直に不快不滿を感ぜられるのであります。其有樣は丁度喫煙者が煙草がなければ不快に感じ、飲酒家が麥酒、葡萄酒、燒酎等が無ければ不快に感じ、

茶の好きな人か平素の飲用時に至りて之を飲まなければ不快に感じ、「モルヒネ」の中毒者が是非とも之を用ゐなければ不快に感ずるのと同じ様だそうであります

○肉食の善惡は兎に角、斯程までに肉にカブレルに至つては、最早や肉を食ふのでなく肉に食はるゝので、衛生的に肉を食するのでなく嗜慾的に肉を貪るのであります。故に大量の肉を食はなければ何となく物足らぬやうな感じがするもので、これを一種の肉中毒と稱せられて居ります

○我國でも遠き神代の太古に於ては、獸肉を以て日常の食料に供したこともありましたが、佛教の渡來するに及び宗教上から其需用も大に妨げられ、獸の皮を以て或職業を營むものすら共に齒せられぬ樣になりました、從て獸肉を用ふるからと云つても多くは野獸の肉であつて、家畜を屠つて其肉を味ふと云ふ殘忍な行爲は少かつたのであります

○然るに歐米各國との交通の開けてから以來、種々の文物輸入と共に肉食説亦た漸次勢力を得て、津々浦々の端までも今は普く行き渡つて居ります。然しながら我國の肉食は絶對的の肉食ではなく、米、麥、野菜、菓實などの草食に兼ぬるところの肉食であるから、大に理想的に近いのであります

○勿論草食人種と云つても絶對的の草食人種は少いもので、草食料理と稱するものも眞の草食のみを調理するものは無いのであります。或は牛乳を混じ、或は鷄卵を交へ、或は魚肉などを共に撮るものであります

○深山の奧の仙人が氣を食ひ霞を吸ふてのみ生活すると云ふのは、大に疑ふべきところであるが、木の芽、木の實などの如き純粹なる草食のみで所謂木食して生活しうるのは確かである。ウェー、カスパリーと云ふ人は草食及び極端なる粗食のみで生理試驗を施した事があるが、其成績上より左の如く云ふて居る、「草食ばかり若くは植物性の粗食ばかりでも、血氣盛りの青年に體力並に精神力を與ふるに不足は無

い。」「只斯かる草食ばかりて困るのは、(一)草食中には蛋白は充分あるが、之と共に不消化な繊維素が多いので、此多い蛋白が悉く身體經濟のために使はれないて、一部は糞便中へ排出されて仕舞ふこと。(二)草食は味覺を刺戟することが少いから、その美味に乏しいこと。(三)肉食ては其食べる分量が少くてよいが、草食ては多くなければならぬ事てある。」而かし「價の上から云へば遠く肉類の及ばぬところてある」と

○すべて食物は活きて居るために食ふのてあつて、我々は決して食ふために活きて居るのてはないから、食料品の眞の價を決めるには、其金錢上の價と其榮養上の價とを能く比較しなければならぬ。然るに獣肉は其金錢上の價の高いのに比し、其榮養上の價は極めて乏しいとのことてある

○ボルンスタインと云ふ人は肉の價に就て次の如く云ふて居る、『肉は高價割合ひに榮養の價値が少ない、極く低く見積つても肉の價の四分の三は其美い味のために仕拂はれ、僅に殘る四分の一が榮養の効を奏するものてある、然るに世人は餘りに肉の榮養價を買ひ被り過ぎて居る』と

○實際肉から甘ひ味ひを去つて仕舞へば、肉の特色の失はれたものて、肉の中には蛋白と結合しない含窒素物があるから、之れが舌、口蓋、胃などに特別な興奮刺戟を及ぼして之を甘美に味はしむるのてあります。然し長く大量に用ふれば健康體をも害するに至るものてあります。即ち

○此肉の窒素成分は心臓と神經とを害する計りてなく、肉は腸の中て腐敗作用を促すものて、腐敗によつて出來た有害物は漸次體内に吸收されて中毒を起す樣になり、又腎臓の病氣を引き起す原因となることがあります

○要するに純粋な肉食は理想てない、草食に兼ねた肉食、これが我々の常食とすべき價値ある食品てあります

眼鏡の話

醫學士　宇野功一君

眼鏡は眼病者に對する一種の藥である、されば平素藥を求むるに其道の專門醫を訪ねて、處方を乞ふが如く、眼鏡を求むるにしても、必ずや眼科醫の精密な檢査を經て、其指揮を受くべき筈て、決して自分勝手に濫用すべき性質のものでない」といふ樣な意味て、世界の眼鏡國といはるゝ獨逸の大家フックス氏が、世人を警められたことがあります。世間には遠視や近視は、眼鏡さへ掛ければ宜いと許り心得て、隨分いかゞわしい眼鏡舖の店頭、或は縁日の露店て、宜い加減のものを買て用ゐて居る者がありますが、之は丁度醫師に行かないて、賣藥を服んて居る樣なものであります、否賣藥は藥にならなくとも、毒にはなりますまいが、不適當な眼鏡は危險て、寧ろ用ゐない方が宜いと思はれるのがありますから、深く注意をして戴かなければなりません、そこで私は眼鏡に關する一般の心得を申述べたいと思ひます。

一概に眼鏡と申しても、澤山の種類がありますが、日常最も多く使用せらるゝ保護用、近視用、遠視用及び老視用の眼鏡に就て御話し致します。

保護鏡、これは專ら眼を保護する眼鏡で、二樣の目的を持つて居ります、其一は外界から異物例へば塵埃、石屑、鐵片の類が侵入するのを禦ぐので、其二は劇烈な光線の刺戟を遮ぎるのであります、石工や鍛匠が塵埃石屑鐵片などの侵入を禦ぐ爲に作つた保護鏡には、硝子の外に金網雲母「セルロイド」製等があります。私が曾て東北の或地方を雪中に旅行しました時に、黑紗で眼を掩ふて居る郵便脚夫に遇ひましたが、之は雪に反射する劇烈な光線を禦ぐ自然の要求から工夫したものと思ひました、光線を遮ぎり、兼ねて塵埃を防ぐには、我々は普通色眼鏡を用ゐます。元來光線は眼に必要缺くべからざるものて、宛も食物の胃に於けるが如き關係を有して居ます、加之過食過飲が胃の機能を害する樣に、餘り

に強烈な光線は、眼を損めますし、又通常の飲食物も胃弱者には、害になると同じ理屈て、普通の光線も或る眼病者には羞明に堪えません、故に熾烈な光線に對して仕事する人とか、眼病て羞明を覺える人は、之を防禦する爲に色眼鏡を用ゐる必要があります。

色眼鏡にも種々ありますが、烟色(即ち灰白色)のが尤も宜しい、單に烟色といつても濃淡に由て十種類ありますが、餘り黑きに失しますと、全體の色を殺しますし、長く用ゐて居る間に、溫熱を生じますからいけませぬ、靑色のは强烈な光線を奪ひますから保護鏡として、たいそう賞賛する人もありますが、猶黃色橙黃色綠色等の光線を通します故に、或種の疾患(網膜遲鈍症)を除くの外は、之を薦めることを好みません、凡て保護鏡は貝殼狀をなせる楕圓形で成丈大きなのが宜しい、側方から來る光線を遮ぎる目的で、今一個の色眼鏡を顳顬側に、鳥兜の樣に繼ぎ足したのがありますが、餘り重過ぎるのが、缺點であらうかと思ひます、眼鏡の外線に息拔きの小孔をあけた金屬板て圍んで、ぴつたりと眼の周圍に當て篏めるのもあります。

近眼鏡、これは近視即ち近眼の用ゐる眼鏡でありますが、爰に一寸近視に就て說明して置きたいと思ひます。

眼の構造は、丁度寫眞用の暗箱と同樣で、其暗箱を開きて、前面の「レンズ」を通して來る光線が、後方の磨硝子の面に、明瞭と物像を結びました所が、宛も我々の健康眼の狀態で、之を正視眼と申します、眼には其磨硝子に相當する網膜と稱するものがあつて、之に外界の物體の像が映ります、正視眼ては眼球の前後徑の長さが一定して居まして、明瞭と遠方の物體を見、また近方のものは調節機といふ靈妙な裝置に由て、自由自在に辨別が付く樣に、巧に出來て居りますが、其前後の長さが更に長くなるとか、短くなるとかすれば、寫眞の暗箱を後に牽き、或は前に押したと同樣に　物像は磨硝子或は之に相

當する網膜の上に生ぜずして、其前方又は後方に結ぶ譯になります、其長くなつた場合が近視で、短くなつたのが遠視であります、近視に於きましては、近方の物體は網膜の上に像を結ぶ故に見えはしますが、遠方の物は認めることが出來ません、之を調整して正視眼と同樣に、遠目のきく樣にするには適度の凹鏡を用ゐれば宜しい。

凹鏡と凸鏡とに係らず、眼鏡の度には舊式と新式との二樣ありまして、舊式の四十番が新式の一番に當り、其番數の減るに從て、舊式では度が弱くなり、新式では強くなります、其關係を一寸申しますと

	弱度												強度
新式番數	0·5	1	1·5	2	2·5	3	3·5	4	5	6	7	8	10
舊式番數	80	40	24	26	16	13	11	10	8	6½	5½	5	4

といふ風になり升。それですから近視或は遠視の幾度といつた許りでは、新式と舊式とに由て大差がありますから、是非新式の幾番とか、舊式の何番とか、區別して云はなければ間違を生じます、併し世間では普通舊式を用ゐて、二十度の近視とか四十度の遠視とか稱へて居ります。

偖近視に眼鏡を與ふるに當りまして完全調整の可否が、年來學者間の問題になつて居ます、詳しく云へば、十度の近視には十度の凹鏡を與ふべきか、或は稍弱度のを用ゐしむべきかゞ議論の在る所で、まだ決着を見ませぬが、矢張從來の慣例に依て、二三度弱度のものを選ぶのが宜しい、之は遠用即ち遠方の物を見る時のことゝて、近用即ち讀書寫字裁縫等の際には其遠用度の凡そ半分位ので宜しい、尤も十度(舊式)以下の弱度の近視なれば、近用は差支のなき限りは廢した方が宜しい。

遠眼鏡と老眼鏡、之は遠視用と老視用との眼鏡で共に凸鏡であります、旣に近視の條で申した如く、眼球の前後の長さが正視眼より短くなつたのが、遠視でありますから、近方の物體は其像を網膜の後に結ぶことになつて、之ゝ見ることが出來ませぬ、遠目は始めはきゝますが、年を經るうちにはきかなく

なります、そこで之を調整して視力を恢復する爲に凸鏡を用ゐます。それには遠用のものと近用の稍々尖より度の强いものとの二種を備へるが宜しい。

老視は一寸遠視に似て居ますが、遠視は全く一種の病氣て、老幼に係らずに來ますが、老視は老人に現る丶生理的變化の一つであります、壯少者の健かな眼は、近業即ち讀書寫字裁縫等を、普通二十二乃至二十五仙米(八寸平均)の距離で致しますが、四十歲後になると、段々其距離內ては細業を採ることが困難になります、殊に夜間燈火に向つて、讀書する際の如きは、體を反らし腕を伸して一種奇態な姿勢を執らねば見え分かぬ樣になります、其不自由を除く爲に、種々の凸鏡を試して、八寸の距離て明瞭と讀書が出來るものを用ゐるのであります、純粹の老視であつて、遠視の加はつたものでなくば、別に遠用の眼鏡を作る必要はありません、老視と年齡との間には、大體一定した關係がありまして、四十歲以上は五年每に、略ぼ〇、五度宛(新式)進んで行きますから、眼鏡は時々に取換る必要があることは云ふ迄もありません、其關係はざつと次の通りであります。

年齡	舊式番號	新式番號
45	80	0.5
50	40	1
60	20	2
70	13	3
80	10	4
90	8	5

老視は眼鏡を掛けなければ進まないなどと、考へて居る人がありますが、眼鏡の有無に係らず年齡と共に進む丈けは進みます、また遠視の初期に往々內斜視(やぶにらみ)が現はれますが、早く眼鏡を用ゐれば治癒します。

近視遠視の外に、亂視といふのがありまして、凹鏡や凸鏡で、どうしても視力の回復しない場合に、凹或は凸の圓柱鏡といふ一種の眼鏡が、ぴつたりと適應することがあります、之は勿論專門醫に精密な

検査を受けた上てなければ分りませぬ。

眼鏡の玉を製へる材料は、普通の硝子、「クロオン」硝子、「フリント」硝子てありますが其性質が少し柔軟過ぎますから精選した「クロオン」硝子を上等物と致します、就中「クロオン」硝子が一番宜しく水晶が之に續きます、凡て眼鏡の玉は無色透明で、之を文字の上に當て乍ら、次第に遠ざけて見て、文字の形が崩れたり歪んだりすることのないのが善いので、眼鏡を作る以上は、是非斯樣な良品を求めなければなりません、彼の白紙の上に載せて横から透すと靑く見える樣なのは粗品で、到底眼鏡として用ゐる價値がありません、我國ては前記の上等物を一般に獨逸玉と稱へて販賣して居ます、水晶の眼鏡も結構てありますが、研磨法が正しくないと不快な色輪を生じます、玉の大きさは人々の眼の大小に準じて定めることが必要て、大に過ぎても又小に過ぎてもいけません。

次に眼鏡を装用するに入要なる附屬物に就て申しませう。眼鏡には枠のあるものと無いものとありますが、若し轉ぶとか、物が墜ち懸るとか、或は撲れた時には、どうしても無枠の方が、壞れ易くて、怪我をする機會が多いやうでありますから、私は枠のあるものを好みます、次は眼鏡を眼に固定する方法てありますが、眼鏡は常に眼前に垂直に立たせねばなりません、故に蔓狀或は鉤狀の柄て耳後に掛けるとか、彈力のある兩柄で左右の顳顬部へ差し込むのが尤も宜しい、殊に近視者の樣に、眼鏡を掛けて長時間仕事に從事する者は、是非そうしなければなりません、其柄を手で握る樣になつた「ロルネット」や、鼻掛眼鏡は用に臨んで折々使用するには、便利でありますが、常用としては不適當であります、遠用と近用との眼鏡を別々に所持する不便を省く爲に、フランクリン氏の眼鏡と云ふのがあります、之は上半に遠用下半に近用の眼鏡を一個の玉に磨り出したもので、唯之を上下に動かせば、遠見近見自由自在て、輕便てはありますが、其境界線が邪魔になる爲

に好まない者もあります。

鼻梁に跨つて兩側の枠を連絡する部分を小橋（俗に鼻形といふ）と稱へますが、人々の鼻梁の形に相當した、例へば低い鼻にはX形、曲つた鼻にはK形、隆い鼻にはC形といつた風に種々な形があります、日本の職工間では之を松葉形とか一本山形とか夫々符牒を付けて居ますがそれ相當の似合たものを選んで作らせる必要があります。

枠、柄及び小橋を作る材料は色々あります、就中鐵は尤も廉價でありますが、其性質が柔軟で、どうも屈曲し易く、從て眼鏡の位置が變りますから好みません、寧ろ鋼鐵か「ニッケル」が宜しい、銀或は金ならば燦爛たる其反射光線の眼に入らぬ樣に、色澤消しにするがよろしい、又黒角や鼈甲などを使用することは御承知の通りであります。

偖玉と附屬物との選擇も濟み、愈々眼鏡を作らせようとする際、尙ほ一二注意すべきことがあります、夫は眼球と眼鏡との距離、及び瞳孔の距離であります、眼鏡が餘りに眼球に近ければ、睫毛が觸るし、さりとて餘りに遠ければ、遠き程凸鏡は其作用を增し、凹鏡は其作用を減じますから、折角檢定した度も、其距離に由て違つて來ることになります。

次に左右の瞳孔は常に左右の眼鏡の中央を覗く樣に、兩者の距離が一致しなければいけません、若し瞳孔が眼鏡の內方、或は外方に偏る時は、不快を覺え、眼に疲勞を生じて、眼鏡の効は少くなります、されば嚴格に云へば眼鏡を作る前に、其等の點に關しても、醫師の敎へを乞はねばなりません、眼鏡が出來上れば先づ試みに之を掛けて、充分に見えるか否かを檢し、次に鏡に向つて瞳孔が眼鏡の中央に在るかなきかを御覽になるが宜しい。

衛生生活の一日（承前）

東京醫科大學　A、B、生君

第二十三　衣服の附屬品は如何に注意すべきか

（其一）襟卷　襟卷は決して用ゐべきものでは有りません。寒い時には襟卷を用ゐねば風を引くと云ふ方もありましやうが、それは全く反對で襟卷を用ゐるから風を引くのであります、何故かと云ふに常に外部の寒冷に對しても耐え來つた襟を、襟卷を用ゐた爲に皮膚の抵抗力を弱くして仕舞つて、最早如何しても襟卷を放す事が出來なくなりまして、一朝襟卷を忘れた時には直に風を引くのであります、常から襟卷を用ゐないで居れば決して襟から風を引くやうな事は有りません。一體襟の部分は、下に着て居る衣服から温が昇つて來て常に温な空氣に圍はれて居るのみならず、頸の周圍は血管の多い處でありますから甚だ温でありまして、決して襟卷を卷いて防がねばならぬ樣な處では有りません、此冬からは襟卷の使用は成べく廢止せらるゝ樣に御勸め申します。勿論婦人の方の襟卷は實際襟に卷くのでは無く、云はゞ肩掛と云ふべき物でありますから從て襟卷としての害は少ない事でもあり、且つは又之れは當今の婦人の方には無くては成らぬ裝飾品の樣にも見うけられますから、之れを御廢しなさいとは云ひ難いが、皆樣の家庭の男の方や小兒には是非廢止させた方が衛生的であります。

（其二）靴　衛生に適つた靴は壓迫が強く無く、足の運動を妨げる事が少なく、空氣の交換がよく行なはれ、保温の完全に行なはるゝもので無くては成りません、然るに如何云ふものか婦人の靴は甚だしく窮屈な、小さい、尖の細いのが流行して、ハイカラとか何とか云はるゝ樣であります。靴のハイカラは各國とも共通と見えまして、西洋の婦人も支那の婦人も皆靴の小さいのを競ふ樣であります。日本ではまだ流行が近年の事であるから左程でも有りますまい

が、西洋婦人の足は餘程發育が妨げられて足の尖は細く成つて萎縮し骨にも變形を來して居る、殊に支那婦人の足は殆と人間の足の狀を呈して居らぬ、歩行にすら困難である、之れは最早不具者と云はねばならぬかも知れぬ。いくらハイカラを眞似たいからと云つても不具者に成る必要は有りますまい。故に男女とも靴は自分の足に合つた物を作らせて用ゐる樣に致したい、而して又靴を誂へる時に注意すべき事は、可なり歩行して疲勞した時の足の寸法を取らせる方が好い、何となれば歩行すれば血液か漸次身體の下部即ち足の方に停滞して其爲に足は勞れると共に太く成るものである、だから其時の寸法を取つて作らせて置けば勞れた時に足が苦しめらるゝ恐が無くなるのであります。

(其三)靴下　靴下の材料は何でも宜しい。只空氣の交換に便なる物を要し、冬は成べく厚くして温きものを要する。靴下が大き過ぎて靴の中で皺が出來たり又は靴下を十分上にたくらぬ爲に皺の有る儘て着けたりする事は足を害する恐が有る。又注意すべき事は靴下の洗濯である、凡て身體に着ける物の中て靴下程早く汚れるものは有りますまい、暫く怠つて居ると直に惡臭を放つて來る、靴を脱いで室内に入て座した時に靴下の臭が室内に擴がるのは實に不愉快であります、只汚ないのみならず洗濯を怠る事は靴下保存の目的にも大に不都合である、度々洗濯すればする程靴下は長くもつものであります、れそ故長くとも一週に一度は必らず洗濯せねばなりませぬ。

(其四)腰の紐類　婦人は腰の周圍に七筋の紐を卷くと云ふ事であります、裝飾の爲めに是非必要の物ならば致し方は有りませんが、成るべく之れを少なくしたいと思ふのであります、若し又是非卷かねばならぬとすれば成るべく弛く卷く樣にした方がよい。日本婦人の帶は隨分幅が廣いから上は胸の邊まで達し、其下に種々の紐が有つて下の方には腰の部にまて卷いて有る、つまり胸から腰迄殊に腹部を甚だし

く壓迫する事となりますから、內臟諸器の爲めに甚だ宜しく有りません、殊に近來は洋裝をする貴婦人の間にコルセットを用ゆる風が流行して來たと云ふ事ですが之れは、以ての外の事でありますコルセットは西洋婦人の最も惡い習慣の一つであります、此爲めに肝臟腎臟に病を得たり、胃腸に障害を起す事は多い事であります洋裝をするのは、結構でありますが此惡風は決して眞似ない樣にしたいものであります。

（以下次號）

活ける家（續き）

醫學士　渡邊房吉君

（七）庖廚

口腔と云ふ應接室から、食道と云ふ廊下を傳ふて、急ひで來た飲食物と云ふ來客が、胃と云ふ庖廚へ繰り込むには、噴門と云ふ食道と胃との堺ひの門から入る。庖廚の用事が濟めば次の室即ち十二指腸に通ずる幽門と云ふ門から出る。

胃といふ庖廚の一室は誠に一の奇妙な部屋で、來客を以て滿たさるれば長さ約一「フヒート」幅大凡そ四「インチ」に達しますが、來客の無い時は小さく縮込まつて居ります。形ちは胃活の廣告にある樣に德利を横にねかした樣な不正形で、隅や角と云ふものが無く、床は凸凹で、壁は三層の筋肉から出來て居ります。一層の肉は縱に、一層の肉は斜めに、他の一層は横に走つて居ります。食物が口の方から入つて來れば此三層の肉は互に申し合せた樣に擴つて胃の腑を廣く大きくする。食物が再び胃の腑から出て行く時には、又も勠力一致して一縮まりに縮まつて之を十二指腸に送り出す。

胃筋弛緩症

と云ふ病氣で、食べた物がもたれ勝ちて、胃の消化が惡いと云ふのは、以上の筋肉が擴つた儘で再び收縮する力が無いため、食物が十二指腸に送り出され

ずに長く胃の中に停滯して居るからてあります。其中に肉の壁の內面には粘膜が張り詰めてあつて、

無數の料理人

が住つて居る胃腺と云ふものがあります。胃腺があるために粘膜は凹凸して平でなく、恰も蜂の巢の樣になつて居ります。

料理人の名は胃液

と云つて、來客がありと云へば直に出迎へて肉を切り、麵麭、乾酪、林檎、馬鈴薯其他すべての食物を調理して、之を活ける家の生活材料とする。

此料理人の食物調理を吾々は名づけて

胃の消化作用

と云ふのであります。胃の消化の惡いと云ふのは一部は胃液の罪で、胃液の分泌が少いとか、多過ぎるとか、料理人の素性即ち胃液の成分が正當でないとか云ふこともありますが、又料理人の働きに邪魔をして其調理を捗か取らせないのにもよることがあります。例令は澱粉類は唾液で消化され、蛋白類は胃と腸とで消化され、油及び脂肪の類は腸で消化れると云ふのが、消化の大體の規則であるのに、澱粉類に能く唾液を混ぜ合せずに鵜呑みに飲んで胃に送るとか堅いもの、硬いもの、不消化なもの、大きな肉のかたまりなどを錄々咀嚼もせずに嚥下すと云ふが如きは、徒らに料理人を困らせる計りで、次では病氣の種を播く所以てあります。食物が消化されるには一定の熱が要るが、此熱は血液から供給されるものであります。食事中に多量の冷水を飲めば此庖厨の火を消して、その料理の妨げとなることが少くない。氷水のよろしくないのも云ふ迄もありません。庖厨には火は必ず必要で、胃と云ふ庖厨にも華氏の寒暖計で約九十八度の溫度が絕へず保たれてゐなければ、如何に勤勉な胃液でも食物を調理することが出來ません。即ち丁度夏の眞ッ盛りだけの溫度が、夏冬共に外界の暑さ寒さに關係なしに保たれて居ると云ふわけてあります。

尚ほ食物が消化される要件としては、前に述べた胃

壁の筋肉が伸んだり縮だりして、胃の中にある食物を揉みに揉んで之を胃液と能く混ぜ合さねばなりません、此筋肉の伸び縮む有樣は恰も蟲の這ふ樣であるので、之を胃の蠕動運動と云ふのであります。餘りに牛飲馬食して胃を一杯に滿たして仕舞へば、袋の中へ物を一杯に詰め込んだ樣に以上の伸縮運動が妨げられ、從て胃液の其中へ滲み込むのが惡くなり結果はおきまりの胃病となるものであります。腹は借りもので無く、同じ身のうち、而かも重要な庖厨である、之が惡くなるのも構はずに飲食の慾に耽けるのは誠や身の樣を知らぬものと云ふべきであります。

昔しヂオゼネスと云ふ聖人がありましたが、一日途中で一少年に會ひ、「少年よ御身は何處に行からるぞ」と問ひかけました時、少年が「さる宴會へ臨まうとして居るのである」と答へたのを聞き、大に驚き戒しめて云ふには、「それは御身に取り大變の事ぢや、宴會へ行けば御身に取りて危險なことがある。之から引き返すがよからう」と無理に歸宅させたと云ふ話しがあります。實に宴會と云ふところは美味佳肴のあるところ、放吟狼藉するところ、牛飲馬食を事とするところ、酒あり、煙草あり、菓子あり、菓實あつて胃を十分に滿たすところ、飲んで食べて騷いで健康を破壞するところであります、嗚呼世俗の所謂宴會へ臨むものは、一杯の酒に胃病を飲み、一品の料理に腸加答兒を食ひ、一皿の肴に腦神經病を味あつて居るものでは無からうか。

胃は食物を消化するものではあるが。全く之を生活材料とするのは胃の彼方にある。

第二庖厨

の役目であります。第二庖厨とは胃に續いてゐる十二指腸と云ふ部分で、丁度十二本の指を横に束ねた位の太さがあるので、十二指腸と云ふのだそうであります。

第一庖厨と第二庖厨、即ち胃と十二指腸との堺を幽門と云ふ、幽明と云ふ字をグリーキの言葉で云ふと

門衞と云ふ字と、門戸と云ふ字との二つから出來て居ります。即ち此處が云はゞ「あたか」の關所てあつて、胃液と云ふ第一料理人から充分調理された者て、胃液の目を逃れて來た樣な怪しい者ては無いと云ふ記標がなければ、到底通り脱ける事が出來ませぬ。苟も一片の食物ても未だ充分胃液の消化を受けないものは、「おのれやれ通らうとて通さうか」と云ふ調子て、芝居て見る富樫左衞門よりは嚴重な調べて、再び胃の腑へ追ひ戻されるのてあります。然しながら「弟義經が山伏の姿に身を扮して北國に落ち伸びやうとして居るから、貴樣の處て喰い止めて通すことは相成らんぞ」との賴朝よりの嚴命のあるに拘らず、遂に我を折つて知りつゝ通さねばならぬことのある樣に、幽門も未だ不消化な食物から押かけられ詰めかけられて、通せ〳〵と迫まられる時には遂に之を第二庖厨へ通して病の本をなすことがあります。

蒸さるゝやうに暑苦しい夏の日などに、甘さうな食物を見れば、其中に腐敗した毒のあるとは露知らず目は第一に欺かれて之を口まて致しては手に相談し、應接室ては喜んて迎へ入れ、庖厨ても之を受納すると云ふ有樣てあるが、幽門の門衞が一度び怪しい曲物が入り込んだと見て取れば、幽門をピッシャリ閉めて、急に筋肉と云ふ兵卒等に命を傳へて、「此曲物を追ひ退けろ」と言ひ渡す。怪しい腐つた食物が胃壁の筋肉の收縮て、追ひ立てられて、元來た道をムザ〳〵と取つて返すのが即ち。

嘔吐

と云ふのてあります。故に嘔吐は不愉快なものてはあるが、活ける家の主人のためには極めて良いものてあります。

幽門通過を許された食物は更に第二の庖厨へ來て、

他の二人の料理人から調理される。

一人の料理人は膵液

と云つて、胃の後ろに横まに走つて十二指腸に通じて居る膵臟と云ふ家から生れて、十二指腸に稼ぎに

來るものであります。他の

一人の料理人は膽汁

と云つて、右の肋骨の下にある肝臟と云ふ內臟器から同じく十二指腸に來るもので、兩人共その性質を異にして居ります。膵液は極めて柔順で蛋白であれ脂肪であれ、澱粉であれ、苟も消化すべきものとあれば直に其仕事をするが、膽汁は氣儘者で脂肪以外のものを餘り消化するのを好みません。然しながら又食物が腸の中で腐敗するのを防ぐ力があるものであります。

我々は是等の料理人をいたわる爲めに、時として休息を與へてやるべきもので、之を過度に働かせ、或は出來ぬ仕事をもさせ、漫りに之を強ふるのはよろしくありません。食事の後四五時間は、胃液、膵液膽汁共に絶へず消化に忙がしいので、消化し終つてから漸く一休みするのであります。然るに意地汚なくも三度の食事の間に所謂買ひ食い、つまみ食いなどの間食をすれば、料理人等は遂に此正課外の勞役に疲れ果つるやうになります。且つ不規則に飲食すれば消化液分泌の狀態が變つて、甚しく健康を損するものであります。序に

飲食物

と云ふことに就て少しく考へて見ませう

飲食をするには深い考慮が要る、單に飲み食いすると云ふ計りでなく更に一定の判斷が要る。一體吾々は、

何故に飲み食いするのである乎

舌に快く味ふためか、甘いと云ふ快樂を貪るためか。吾々の飲食するのは實に是等の爲めでなく、生活するがためであります。吾々の攝取れた飲食物は庖厨で消化せられて腸壁から吸收せられ、遂に身體組織となるものであります。此作用を

食物の同化作用

と云ふので、此同化作用がなければ身體の榮養は保たれず、末遂に餓死せねばならぬのであります。すべて身體の組織は細胞から出來てゐて、攝取れた飲

食物は此細胞組織となるものであります。此新しい材料から出來た細胞が、古い使ひ盡くされた材料と交代のて始めて再び活潑なる身體運動が出來るのであります。故に供給される材料が餘り少きに失すれば、細胞の恢復も不充分て、從て病氣を釀す樣になる。同樣に供給が多過ぎるか、又は組織に同化せぬ食物をとれば消化作用も亦不完全になるのであります

飲食物に關する生理上の本義を心得なければ、如何に學務に勤勉て、才能に秀いて、技術に堪能てあつても健康を破ることが往々てあります、茶、珈琲、酒類は神經の毒てある計りて食物てはなく、身體組織にも何等の資する所がなく、自體榮養にも何等の用をもなさぬのてあります。只打ち疲れて元氣の消耗した時に多少之を興奮させるのと、渇きの念をとめる力のある許りてある。賢明ならんと欲し、健康ならんと欲し。世に一かどの役に立たうと欲するには成るべく之を避くべきて、麥酒であれ、葡萄酒であれ「サイダー」であれ、何であれ、苟もアルコールの種類は一切之を遠ざくべきてあります

飲食は快樂では無い、必要である身體で使ひ耗らされた榮養材料の缺乏を補ふところの供給てあります。故に咽喉三寸を喜ばせるためてはなく、實に全身の榮養を維持して身體をして益々健康活潑ならしむるためてあります。されば

飲食物の品質と分量とに就ては殊に意を致すべきて、飲み食ひした物のために苦しむと云ふのは、誠や飲食本來の目的を忘却した愚の極てあります。

來客友人などを饗應すにも美味佳肴のみを陳列するのは宜しくない、殊に酒を强ふるが如きは人を毒するものであります。互に淡白なる物を食し心情より之を迎へ、胸襟を開いて相語り相問ひ互に其感興を湧かしむべきてあります。

有名なる

エマーソンと云ふ人は左の如く云ひました
「愛する妻よ、我家を訪づるゝ男女に對しては、價貴き珍味佳肴を饗應せんと努め思ひ煩ふな、是等の食物は何處の店前にもありて、僅に數金を投じさへすれば、思ふが儘、欲するがまゝに買ひ得らるゝもので。故に來客の望み通り、何處の市を駈け廻りても、何處の店を渉獵り歩いても、若くば何程の價を仕拂ひても、求むることも買ふことも出來ぬ汝の美しい顏と、好い聲とイサ〲した擧動と、溢るゝ心情と、もゆるが如き熱心と、深き思慮と意志とを見するが大事ぢやぞ」
と誠に至言でありませんか

姙娠中の養生（二）

K、K、生君

六、着物のこと

着物の着方であるが、姙娠中は殊に身體を壓しつける様な厭があつてはなりません。我國の服裝はこの點から申しまして甚だしい不都合はない様ですが帶などあんまり固く締めて腹を小さくくゝり上げるといふ事は非常に有害であります。下着にはフランネルのやうなものがよい、これは汗をよく吸ひ取つて風をひく恐を少くするからであります。洋服を着る人はいづれ靴下を穿く事であるが、靴下止をつけるならば膝の下へ固く結ぶのはわるい、さもないと血液並に淋巴液の循環がわるくなつて、血管の擴張を起したり、足に水腫が來たりするから、一寸した事だけれども氣を付けなければなりません。コルセットは緩やかにして居れば始めの二三ヶ月はつけて居てもよいが、お腹が次第に大きくなればこれは止めて外のよく合ふ帶をする方がよい

七、乳房のこと

乳房が大切なものであることは申すまでもありません、殊に後々は自分の乳を飲ませて育てるのであるといふ事を考へて居れば、姙娠の中から特別な注意

があるのてあります、乳首は前の方へ引張り出して後て子供が飲みやすい樣にしてやり又毎日冷水て拭いて乳首を固くする樣にする、その外だん〳〵汁が滲出して來る頃になつたら綿をあて、吸ひ取らせ、一方にはこれて外傷の豫防をして置くといふのも都合がよい事てある

今迄子供に乳を呉れて居た婦人が又姙娠したならば、直ぐに乳を離して仕舞はなければなりません。

八、精神上の注意

姙婦の精神狀態は周圍の人が氣をつけて平靜にさせて置かねばならぬ。誰だからと云つて氣の揉める樣な事をいはれたり腹の立つ樣な事をされたりすれば不快に感ずるのは當然だけれども、ひどく機嫌を損するといふとは姙婦の養生には殊の外少からぬ影響のある事てあります。姙婦の要求して居る事は周圍の人々が早く呑み込んてズン〳〵片をつけてやる樣にし、些細な我儘位はあつても忍耐してやらなければならない。姙婦を激動させるのは大々的禁物てある。感動し易い人てあるとひどく口惜しかつたといふ樣な事が起因て流產する事さへあるのてあります。若し姙婦が何にも用のない人て、所在なさに困り果てるといふ樣な事ならば、何か善い書物を見付けて讀ませるなり、靜かな面白い話てもして聞かせるなり、或はソロ〳〵と少し位の散步てもするなり、何かそのやうな事をして氣を紛らせ、一人て考へ込ませない樣に導いてやらなければならない。

姙娠又は月經の時に精神の平均が取り難くなるといふ事實はズット以前から精神病學者が注意して居ました。ヘロレルといふ學者は女て自殺をした人七十人について詳しく調べた處が三十三人といふものは丁度月經中或は姙娠中てあつた。ロンブロゾーといふ人の統計によるともつと割合が多いといふ事てあります

前にも申した通り色々な點て運動といふ事が身體に關係を有して居りますから、晝間は成るべくブラブラ寢て居ないがよいが、夜床についたならば八時間

位はグッスリと寢てそれから起き出す樣にしなければいけない。寢室の溫度は華氏の寒暖計で六十五度乃至七十度位にして置くのが一番心地がよい、我國の家屋は、造り方の關係から外の溫度の影響をうける事が大きいので隨つて室内の溫度を思つた通り一定にして置くといふ事が六ケしいが、いろ〳〵な工夫をしてなるべく適當な溫度を保つ樣にしたいものであります

九、早產のこと

七ケ月の終りに近くなつたらば、ソロ〳〵諸般の準備を心がけて置かねばなりません、なぜかと云ふと、此頃になると思ひがけなくお產をするといふ事があるからである。一方にこの準備をするのは肝腎でありますが、今迄述べて來たいろ〳〵な注意はこの時に當つて殊更嚴重に守つてなるべく早產のないやうに豫防して貰ひたいので、さもないと一度やつた早產が癖になつて姙娠の度每に此の恐を招かねばならぬ樣な目に逢ふ事もあるのであります。

十、姙娠中の病氣

姙娠は生理的の出來事で決して病氣ではない。生理的だといふ點から見ますと、御飯を食べてお腹がよくなつて、それが消化して吸收されるのと少しも變つた事はない、けれども姙娠と同時に全身に起つて來る生理的の變化といふものは大層こみ入つたもので、迚も飯を食つて消化される、吸收される、血の循環が一時盛になると云ふ位の事とは比較にはなりません。斯ういふ變化の起る時でありますから、隨つて外の樣になる病變がつけ込むのにも好都合であるものと見えまして病氣は割合に多いのであります、病氣となれば何れ醫者の手にかゝる事でありませうから細かい事は省きましてどんな病氣があるかといふ事を大體申して見やうと思ひます

(イ)嘔吐　姙娠時に嘔吐の起る例はなか〳〵多いもので其輕重は種々でありますけれども、姙娠の前半期に於て、多く早朝空腹時に來るのであります。朝床の中で少量に食事をする、起き出してからはなるべ

く外へ出て新鮮な空氣中に居るといふやうな事で大抵直るが時には數日間も寐て居なければならない場合もあります

嘔吐の中でも斯ういふ工合に來るのは、勿論不愉快てはあるけれどもまづ甚だしい害もなく、姙娠の半期を過ぎると自然に止んで仕舞ふけれども、どうしても止める事の出來ない慢性の嘔吐が來る事があります。それも始めの間は食物を食べてから起るといふ樣な事であるが、進んで來ると食物を見るのも胸がわるくなり、勿論何にも食べないものであるから患者は次第に瘠せる、色々な症狀は高まつて終には吐いた粘液に血が混じつて來る、熱は昇る、患者は衰弱して捨て丶置けばつまり死んで仕舞ふといふ樣な結果になる事さへあるのであります。斯ういふ嘔吐の起る原因は、多くは子宮病、胃腸病、肝臟、腎臟、心臟等の病氣、腦に出來た腫物、痿黃病、貧血等であります。それであるから若しかういふ病氣のどれかゞあるとすれば、それから先きは治してかゝるのが醫者の職分であります

他の病氣が原因となつて居るとも思はれない純神經性の嘔吐もあります、斯ういふ場合は重に精神的に患者を治療するのが第一で、必要があれば長い間口から食物を送らないで、滋養灌腸を續ける事もあります、其外いろ〳〵盡すべき手段もありますが、いざどうあつてもいけないとなれば最後の手段は人工的の早產をさせるより外はありません、或人の如きは彌最後といふまで待たずに、もつと早くした方が宜いとまで考へて居る

(ロ)むねやけは多くは食物の爲であるから、勉めてむねのやけるやうなものは食べない樣にしなければなりません

(ハ)衰弱、眩暈、卒倒といふ樣な事は、人寄せの多い、空氣の汚れた、閉籠めた熱苦しい室などに居るとやつて來る、そうしてその樣な處に長い間立つて居た時に殊に多いといふ事であります、原因は心臟の疲勞と、それに伴うて來る腦貧血でありますが、衰

弱も眩暈も、早く清々した空氣中に出て靜かに横になつて水の一口も飮めば直ぐによくなる、卒倒した時は、胸を寬げて呼吸を樂にし、新鮮な空氣が充分によく通ふ樣にし頭でも冷やしてやれば治ります

(ニ)姙娠中に脚の靜脈管が太くなつて青筋を張る事がある、又脚に水腫の來ることがある、何れも循環がわるくなるからであります。斯ういふ時は彈力性のある靴下を穿くのがよい。それでなければ足に繃帶をかけてもいゝですが、さうするにはまづ床の上に寢て下肢を高く上げ、靜かになてて血を腿の方へ送り、さうして置いて趾の處から一樣の力で締まるやうに膝の下まで卷いて安全針で留めて置くのであります。青筋の張つて居る處は屢々瘤々になつて居る、それが痒くつても濫りに搔いてはいけない、間違つて搔き壞すとひどい出血をします、若し萬一出血したならば、淸潔な綿で血の出る處を押し付けて置いて醫療を乞ふ樣にせねばなりません。足の水腫が强い樣ならば立つて居るのは惡いので、脚の方をなるたけ上にして置かなければならぬ。坐つて居るのは立つて居るよりよく、臥てゐるのは坐するより更に宜しいのであります。水腫のある時は每に醫士の診察を乞ふ事は必要であります

(ホ)顏面神經痛と頭痛とは度々來る病氣であるが、頑固な便秘がその原因をなす事が多いから、前にも申し述べた通り便通の事をよく注意するのが大切であります。それから、まだ適當に療治すれば充分に助かる齒を一寸した事で拔いて仕舞ふのはよくありません。齒の健不健が身體の健康に大關係のある事は思つたより大なるものであります

(ヘ)皮膚、姙娠中は皮膚の抵抗力が弱くなるものと見えて急性の皮膚病に罹りやすくなる傾があります、であるから、勉めて淸潔にする樣に心がける必要があります

顏面に色素細胞の形成が盛になつて、黑褐色の斑紋が現はれて來る事がありますが、これに對しては全く手の下し樣はない、額と上唇とに出來るので、

殊に婦人科的の病氣に罹つて居る人に多く、名けて子宮褐色斑と云ひます

姙娠中に起つて來るその他の病氣中て、全く特有なる經過をとるものが二三あります、それらの事も一寸簡單に申して置きませう

（ト）多くの急性傳染病、例へばコレラ、チフス、天然痘、稀にはインフルエザンの如きものゝ際には姙婦は大概流產して仕舞ふのが例であります、熱が高ければ高いほど、一層その事が多い

（チ）姙娠腎、姙娠の中に尿中に蛋白質の出て來る事は隨分屢々あるけれども、皆が皆正式の腎臟炎だと云ふ譯ではありません、單純な姙娠腎と申すものである事も少くはない、この病氣は、始めて姙娠した婦人が、其姙娠の後半期に起すのが殊に多い樣であります。隨分强度の水腫も來るし、小便の量は減るし、其中には多量の蛋白質があるし、腎臟の細胞も出て來るし、稀には血液の成分も出て來ると云ふ樣な激しい症狀はあるけれども、お產が濟むと小便が澤山出る、水腫はなくなる、蛋白質も何時か消え失せて仕舞ふ、これはまづ極めて無難な經過でありますが、これと共に一方には急癇といふ病症を引き起す事もあるのであるから、決して醫士の注意から離れて仕舞ふ譯には參りません

（リ）眞の腎臟炎は第一病歷から推定されます、それから腎臟炎の時は全體の樣子がズッとわるく、單純な姙娠腎の時とは違ひます、患者はズン〳〵瘠せる、尿の著しい變化が起る、姙娠前から腎臟炎のあつたものでは益々わるくなつて、終には尿毒症を起して來るか或は急癇を起すのもある、胎兒にとりましても豫後は頗る不良で、フェーリングの報告によると、斯ういふ場合十六の中で丈夫な子供の生れたのは五人であとは皆死んで生れたといふ事であります。水腫がひどければ病狀は隨つてわるくなつて、醫者はそのために即時墮胎せしめねばならぬ事がある

（ヌ）母體の梅毒が胎兒に及ぼす關係は、母體自身の傳染の時期によつて種々であります。除外例とし

ては傳染後八年も十年も經て、尙流產の來る事があるけれども、通例は五年後にはこの影響を蒙らないとしてある、母體へ傳染したのが姙娠した時と同じ時であれば、臨月に至つて死んで腐れた樣な胎兒が生れる、よし又生きて生れても矢張り病氣をうけて居て、幾年もたゝないで死んで仕舞ふといふ樣な事になります、既に姙娠してから後又傳染したものでは恙なく健全な子供が產れるのが例であります

（ル）心臟の病氣がある人は姙娠中に重態になつて、そのために矢張り人工墮胎を行はねばならぬ事がありますが、この種の患者の危險は出產の時に一番多い、それですから滿足にお產をするにしても出來る丈け輕く又短時間の中にやる必要があります、產蓐になつても同一の危險は尙去らない事がある、斯ういふ次第でありますから心臟のわるいといはれて居る姙婦は、一方では盛んに滋養强壯の療法をやつて他の一方では勉めて身體並に精神上の過勞を避けるやうにしないといけません、氣管並に氣管枝の病氣は非常に餘計に心臟を働かせるものであるから、勉めて斯ういふ病氣にかゝらない樣に養生する事が肝要であります

藥品のきゝめは平生と大した差異はないが、或種の藥品は墮胎の危險があるのと、さなくとも胎兒に有害な働を及ぼすのとて用ひてはならぬのであります、普通の藥店で買へるテレビン油、淸血劑（賣藥）等も用ひてはなりません、峻下劑も用ひられない事は既に敍べた處であります

姙娠中房事は愼まねばなりません、其過度のために流產する例も多い事であります、殊に臨月に近くなつては傳染病の黴菌が進入する恐があるので絕對的に止めねばなりません

（終）

講義

衛生學大要（承前）

醫學士　河野衛君述

それから空氣の中には塵埃を含んで居ります、その塵埃は種々な形になつて存在して居りまして、其の形及び起り具合に依つて、衛生的の關係も亦色々であります、氣中に塵埃のあるといふ事は―東京のやうな塵埃の多い所ではヨク見えますけれ共―室內抔ては一寸分らぬ事がありますが、電氣の光や、太陽光線等凡て光線が射入するとヨク塵埃のある事が判ります、光線の射入に依つて、吾々は吾々の住室に驚くべき多量の塵埃のある事に氣が附きます、吾々の眼といふものは、案外弱いもので、平素可なり清潔な積りて平氣て居りますけれ共、誠にそう清潔て塵一つも無いといふ譯には參りませぬ、眼光紙背徹にする抔言ふは愚か、眼の前にチラ付いて居る塵埃を見る事が出來ないで、平氣て以て此中で呼吸を營んで居るのであります、

そこて塵埃と言へば細微なものである事を誰も承知して居りますがネーゲリといふ人は此塵埃を三種に區別して居ります、それは塵埃の大さに依つて分けたもので、第一は吾々の肉眼で見る事の出來るもの、第二は光線を通らせて始めて見えるもの、第三は顯微鏡でなければ見る事の出來ないものと、斯う三種に區別して居ります、此第三の中には彼の黴菌のやうなものも含まれてあります、

塵埃は如何にして生ずるか

と申しますと是れは色々な原因から起つて來ます、先づ地球の表面にある岩石抔か、水や、溫度や、住民の働作等の結果として、破壞せられ、是れに依つて、塵埃が發生する、それから溫暖の目的に使用する薪炭とか、或は燈火の目的に用ふる色々な物體の

燃燒するに依つても、塵埃が發生する、此の煙の中に含有せられて居る塵埃は甚だ不愉快て、極めて有害なものてあります、そうして此燃料、燈火から塵埃の起るのは、燃燒が不完全てある場合に發するものてあります、その塵埃は主に眼て見えるやうな石炭の細微なる粉末や灰分或は炭化水素のやうな眼に見えない物から成り立つて居ります、それから薪炭なり燈火なりが完全に燃燒せられた場合には、上のやうな塵埃を發生せずして、炭酸と水蒸氣とを發生しまして、之等は大氣の中に雜つて行つて、灰分は跡に殘るのてあります、それ故に工場のある所抔ては、塵埃の爲めに起る障碍を減するといふ事は極めて重要な事柄てあります、工業が盛になると火をたく裝置を盛んに應用するやうになつて來ますが、此場合には、出來得る限り燃料を完全に燃燒させて、成るべく其燃料を有益に利用し、そうして同時に人の健康に益のあるやうに企てなければなりませぬ、そうして此目的を達するのには、燃燒の起る場所の裝置構造を完全に改良し、空氣の流通を良くし、それ〳〵今日の學理に適應した構造にしなければなりませぬ、それから其局に當る人が學問技術に精通しなかつた場合には裝置なり、構造なりが如何に完全てあつても、燃料を良く利用する事の出來ないのも明白な事てあります、鑢を使用する所、瓦を取扱ふ所抔てはヨク塵埃が起る、之れから石工が石を削つたり抔する場合にも盛に塵埃が發生する、斯ういふ塵埃は肺の中に達して肺を刺戟します、西洋てはそれ故に石室て仕事する勞働者の賃銀は大變に高い、その代り生命も短いといふ事てあります、炭坑工夫は恆に石炭の細末を吸ひますから肺に之れが沈着しまして、黑色を呈して居ります、

吾々は多くの塵埃の中に生活して居るのてあります、それ故に隨分此塵埃を呼吸して居りますけれ共、普通は極めて少量てありますからして、別に何の障害を蒙むる事はありませぬ、それは鼻氣管及ひ氣管枝には粘膜といふものがあつて、其表面には氈毛細

胞といふものがありまして、其氈毛の運動に依つて、吸入した塵埃は皆外の方に送り返さるからであります、此氈毛といふものは絕へず外の方に向つて運動して居りまして、少しの塵でも來れば直に外の方へ送つて、內の方即ち肺の方に進入する事を許しませぬ、序に申しますが、此氈毛の働きを窺ふのは蛙を捕へて實驗するのが一番面白い、それは蛙の口をネジ明けて置いて、上顎の方を下にして、口蓋の奧の方に、墨の粉を少しふりかけて置いて、チット此の墨粉を注意して見て居ると、其粉末が段々と外の方に押されて動いて出て來るのがヨク見られます、

然るに塵埃の量が多くて、氈毛細胞の運動で之を悉く外方に送り出す事の出來無い場合には肺の方に達します、此時ドウなるかといふと、その塵埃は肺の氣胞の中に屆きまして、茲で、白血球に捕へられて、淋巴腺を經て、次の淋巴腺に行きます、此淋巴腺は肺て氣管が分枝する所にありますから、此れを調べて見ますと石炭の塵埃てあると黑色になつて居ります、都會に住んで居た人の肺を死後に見ると往々此黑色に變して居る腺を見る事があります、

そこで塵埃が肺に入ることを上に申し上げました如くに、白血球が之を取り上げて、淋巴腺に送り屆けまして、肺氣胞に塵埃の溜らないように勉めて居ります、丁度言ふて見ますと白血球は巡查の役を勉めまして、淋巴腺は恰も交番所のやうなものであります、惡人の塵埃が來たら、直に白血球は蹶起して、之を附近の淋巴腺に拘引して行くのであります、

然しながら塵埃の量が多くて、絕へず之を吸ひ込むやうな狀況の下にある時は、氈毛細胞の働きで、吸ひ込むだ塵埃を外方へ送り返す事か出來無くなつて來ます、此時に塵埃は用捨なく肺の氣胞の中に這入り込みまして、此所に滯留します、そうなると如何なる變化が起つて來るかと申しますと肺臟の組織を此塵埃が刺戟しますからして、其結果として、肺組織の中の結締組織といふものが增殖して、堅くなつて來ます、そうして、吸入した塵埃の種類に應じ

て、種々な色が附きます、
さりながら斯くの如き變狀が起つても、直接に生命に危險のあるやうな事はありませぬ、それは前に申し述へましたやうに、成程結締組織は增殖しますけれ共、肺の呼吸が障碍せられる程に著しくないからであります、而しながら茲に注意しなければならぬ事は、斯かる變狀があるといふと、往々氣管枝加多兒を起したり。進んでは肺炎抔を起し易くなります或は肺結核の發生する源になり易いものであります、

そこで炭坑の工夫のやうな者は、石炭の塵埃の澤山ある場所で仕事をやつて居りますから、多量の塵埃を吸ひ込みます、それ故に死後其肺を取り出して見ますと、黑い色が一面に附いて居ります、或は立派に黑色の斑點か畫いてあるものもあります、其色合の程度は色々であります、それから氣管枝腺といふものがありますが是れも同く黑色になつて居ります、此のやうな肺臟の事を坑夫肺炎と呼んで居る人があります、それから石工は石の塵埃を吸ひ込みますから之れが矢張り肺の中に這入ります、此場合には黑色でなしに、灰色を呈して居ります、それから鐵を取扱ふ職業を營む者は鐵の粉末を吸ひ込みますから矢張り是れが肺の中に溜ります、此場合には死後肺臟を取り出して檢査しますと赤色をして居ります、或は黑い色をして居る事もあります、斯ういふ職業をやつて居る人は往々生命の危險を招く事があります、それから銅、亞鉛鉛のやうな金屬の粉末が肺へ吸ひ込まれる事もあります、或は植物性の塵埃を吸ひ込む事もあります、是れは左程に危險な事はありませぬ、是れは木綿や煙草や木材であるとか又は麻、亞麻抔言ふものを取扱ふ人に見る所であります、此等の障碍に逢はないやうにするには、如何にしたら宜しいか抔言ふ事は工業衛生に屬する事項でありますから、茲には述べませぬ、それから塵埃は眼の結膜を刺戟します、或は鼻腔の中、咽頭等の中へも入りまして其粘膜を刺戟して茲に粘膜の加多

見を起す事があります、

話しが大分脇道に這入りましたが、要するに空氣の中には何所でも多少に拘らず、塵埃のあるものであつて、是れが非常に多くなるとか、或は塵埃を多く起すやうな職業に從事して居る人は、此塵埃を肺の中へ吸ひ込むから、往々危險があるといふ事を申し述べたのであります、

そこで此塵埃は、普通どの位空中に含まれてあるかと申しますと、無論場所職業に依つて異なり、且つ氣候の具合に依つても大なる相違がありますから、一定した所を言ふ譯には參りませぬけれ共、普通の居室では、一立方迷突の中に、一、六密瓦あるといふ事であります、炭坑ではズツト多くて、十四密瓦位であります、市街抔では隨分多いけれ共、雨の降つた後は大變に減少して居ります、巴里の市街では、一立方迷突の中に二十三密瓦あるけれ共、雨の降つた後には著しく減じて、六密瓦位になるといふ事であります、それから塵埃の中には前にも申し述べましたやうに、彼の黴菌といふ奴が居るてす、一體外氣の中にある塵埃といふものは、化學上から言ふと、大部分は無機物から成立つて居るのて、其小部分が有機物から出來て居ります、此有機物の中て大切なものは即ち黴菌であります、此黴菌は乾燥した所に落ちたり、或は茲で發育した者は、空氣の流通に依つて、空氣の中に入り込みますけれ共、水の表面にあるものは、決して空氣の中へ入つて來る事はありませぬ、併しながら水が小滴や霧のやうになつて飛散した場合には、之れと共に、黴菌は空氣の中に雜り込んで來ます、例へば吾々が咳をするとか、クシヤミをする時抔には、黴菌が居たら、是れが空氣中に飛散します、それ故に肺病患者抔が咳をすると微細な水滴と共に、結核菌が空氣中へ飛び出しますから、傳染の危險があるのであります、

そこで外氣の中には、平均一立方迷突の中に、大約百乃至千位の黴菌が居ります、風が吹いて、且つ空氣が乾燥して居る時には、黴菌は多くなるけれ

共、好都合の時には段々下の方に落ちて黴菌の數は減少するのであります、それは黴菌は空氣よりも重いからであります、

そこで、空氣中に塵埃のある事の御話しは大略上に申し述べましたから、是れから、私は日本の室内に於ける掃除法の事に就いて、少しく意見を申し述べたいのであります、

通常室を掃除する時には、大抵ハタキを用ひて居ります、是れは戸、障子、戸棚、机抔の上に溜つた塵埃をハタキ落す目的で、次に座の上を箒で掃除して居ります、掃除の濟んだ後暫く戸障子を明けて置くときは、塵埃も外へ去つて了ひます、然しながら中々ソウ甘く塵埃は室内を去らぬから、再び元の戸障子、机の上抔へ塵埃は溜ります、それ故ハタキで掃ふといふ事は、一寸宜しいやうでありますけれ共、實は塵埃を除く良法では無いと私は思ふのであります、又塵埃は去るとしても、大變な塵埃を立たせて居室の空氣を不潔にするから、甚だ衛生的で無いと思はれます、そこで私は室の掃除をするのには、布片を水で濕して、それで以て、丁寧に一々戸、障子なり机の上なりを拭ふのが最も良い方法であると思ひます、勿論是れは時間も掛り、且つ面倒でありますけれ共、ソレはドーモ致方がありませぬ、凡て塵埃を可成拭ひ取る方針にして、可成空氣中に飛散させぬやうにしなければならぬと思ひます、

それから役所とか、學校とかの庭の掃除の仕方を見ますと、水も何にも撒かずに、乾いた土地の上を掃いて居ります、それ故に非常な土塵埃を立てゝ平氣で掃除をして居ります、是れでは何の役にも立たぬ、塵埃の中で働いて居る人は固より、通行する人も多量の塵埃を吸ひ誠に不愉快であります、それから其塵埃は用捨なく、室内に飛び込む、誠に無意義なやり方と言はなければなりませぬ、それから多人數集まる場所、殊に講義室抔でも、雜巾を使はずに、單に箒で掃いて塵埃を立たせて居る所があります、其浮遊した塵埃は再び机や窓の緣抔に溜ります、只

だ床の上の塵埃を机の上へ置き換へたに過ぎぬやうな狀況であります、以上の有様といふものは、掃除をする人は何も知りませぬから、當局の監督者たるものが充分に注意をして、地面の掃除なら必らず水をまき、講義室のやうな所なら是非共水に濕した雜巾を使ふやうにしなければなりませぬ、

塵埃の話しは先づ是れ位にして置きまして、是から

氣候と風土

との事を少しく御話し申しましよう、前に申し述べましたやうに、直接なり、間接なりに、太陽の影響の爲めに、大氣の中に於て起る現象が色々ありまして、是れは、溫度の變化、空中の濕氣の分量、それから氣壓、その次には空氣の運動即ち風、斯ういふものであります、そうして此等種々なる現象が一地方の氣候風土を定めるものであります、換言すれば、一地方の氣候風土といふものは上述の諸現象の支配を蒙むるものであります、そうして氣候といふのは大氣の狀況を指すので溫暖であるとか、寒冷であるとか、或は風が强いとか、乾燥したとか濕潤の氣候であるとかいふ區別を立てるのであります、

そこで氣候の變化は何に依つて起るかと言ひますと、先づ氣壓に關係があります、一體空氣は氣壓の高い地方から、氣壓の低い地方へ動いて來るのでありますから、其氣壓の差の大小に依つて、或は强い風が吹き渡る事もあれば、或は弱い風の吹く事もあるのであります、氣壓の高い土地では氣候は常に一定であつて、乾燥して居るけれ共、氣壓の低い所では、一定でなくても、もつて居ります、

そこで土地の地理的位置と其場所の狀況とに依つて、起つて來る所の年々の氣候の具合に依つて、一、地方の風土といふものが支配せられます、それで風土といふのは、地球表面の一局部に於ける、大氣の平均の狀態を示して居る所の氣象的現象の全體を指すのであります、それ故に氣候といふものは種々の現象の續いて居る中の一期間を指すのであつて、其の年々歳々に於ける略ほ一樣な經過が風土と名ける

のであります、そこで風土を定めるには先づ數年數十年間續いて、其土地の氣象的諸現象を觀察しなければならぬ、風土に最も重要な關係を持つて居るものは溫度であります、其溫度に依つて熱帶暖帶といふやうな區別を立てるのであります、

熱帶の風土が人の健康上に及ぼす危險は中々に多樣であります、其危險の主なるものは日射病と熱射病とであります、その次には傳染病が甚しく流行しまして、例へば「ペリペリ」であるとか「マラリア」であるとか或は赤痢とか又は重症なる腸加多兒其他虎列拉といふやうな恐しい病が流行するのです、其外に肺結核であるとか肺炎であるとかいふやうな病氣も決して稀ではありませぬ、

暖帶の地方では種々な變化が起つて來ます、其南方では溫かな季節と冷い氣節とがあるけれ共、北方では春夏秋冬の區別がある、北の方では夏と冬との二季が區別されてある、風雨霧等の氣候的狀態が明瞭に區別せられて居ります、そうして熱帶よりも其變り方が著しいのであります、それで暖帶では一年間の死亡數は場所に依つて種々の差があります、是れは風土氣候が恒に一樣でなくて、變化し易いといふ事に依るのであります、

海邊では其溫度が常に平均して居て、大なる變化が無い、そうして陸地よりも、冬は暖かで、夏は冷しい、それから晝と夜との差異も極めて僅かであります、又海岸の濕度は陸地よりも遙に高い、夏は空氣が海面から海岸の方に向いて運動するけれ共、冬は大陸が冷却せられて、風は陸から海岸の方に向つて吹くのであります、それて海邊では肺結核の病者が尠いが、陸地の内部では種々な病が多くある　それて海邊の氣候は吾々の健康上極めて有益でありまして、氣象の變化が著しくないのと、それから常に動いて居る空氣が絕へず皮膚に作用し、之れが爲めに血液の循環及食物消化の機能が佳良に向ふからであります、

高い土地では氣壓が非常に低い、そうして光線の

働きは甚だ強い、それから高い土地の溫度は山岳の形態にも關係する、そこて高い平地は、嶮岨な山よりも餘計に溫度を享ける、嶮岨の土地へは太陽の光は垂直に落ちない、それ故に平坦な高地ては溫度は極めて高い、それから濕度も高い平地と嶮岨な山岳とては相違があります、土地が高くなればなる程濕度が減じて來ます、又高山ては雨霧等が比較的屢々やつて來る、是れは、溫い谷間のやうな低い所や或は遠方の土地から來る氣流は多くは高い溫度を持つて居りますからして、冷い高山へ來て冷却せられると玆に雨霧となるのてあります、高山に停留して居る事は、平地に居るのよりも健康に益があります、高山の空氣には塵埃が一體に尠い殊に雪ても降ると殆んど全く塵埃は無くなります、又氣壓が減少したり、溫度が低くて、平均して居て、そうして空氣が強く運動する時には、心臟や肺臟の働作が亢進して來ますからして、之れが爲めに刺戟を受けて全身の新陳代謝作用が亢進して來るのてあります、

高山に於ては酸素の壓力も尠いから、此所に滯留して居ると、人の血液か變化を蒙むる、即ち血液の中の赤血球の數と、血液のヘモグロビン含量とが增して來る、といふ事は近時多くの人の研究した結果であるといふ事てあります、それ故に、高山に轉地をして、病が治るといふ重なる原因は此血液の變化てあります、

それから海邊ても、矢張り高山に於て起るやうな作用が行はれる、即ち海邊に於ても血液の中の赤血球の數が殖える、といふ事であります、高山ては空氣が稀薄てあるから、玆て呼吸を營みますと、肺臟の中を循環して居る血液の中の赤血球に含有して居るヘモグロビンを酸素て以て飽和させる事が甚だむづかしいから、即ち肺臟呼吸が障げられますからして、血液を製造する器關が刺戟せられまして、是れに依つて赤血球の數が增し、血中のヘモグロビンも其量が殖えて來るのであります、そこて海邊ては人體の組織の中を循行して居る血液から出す酸素の量

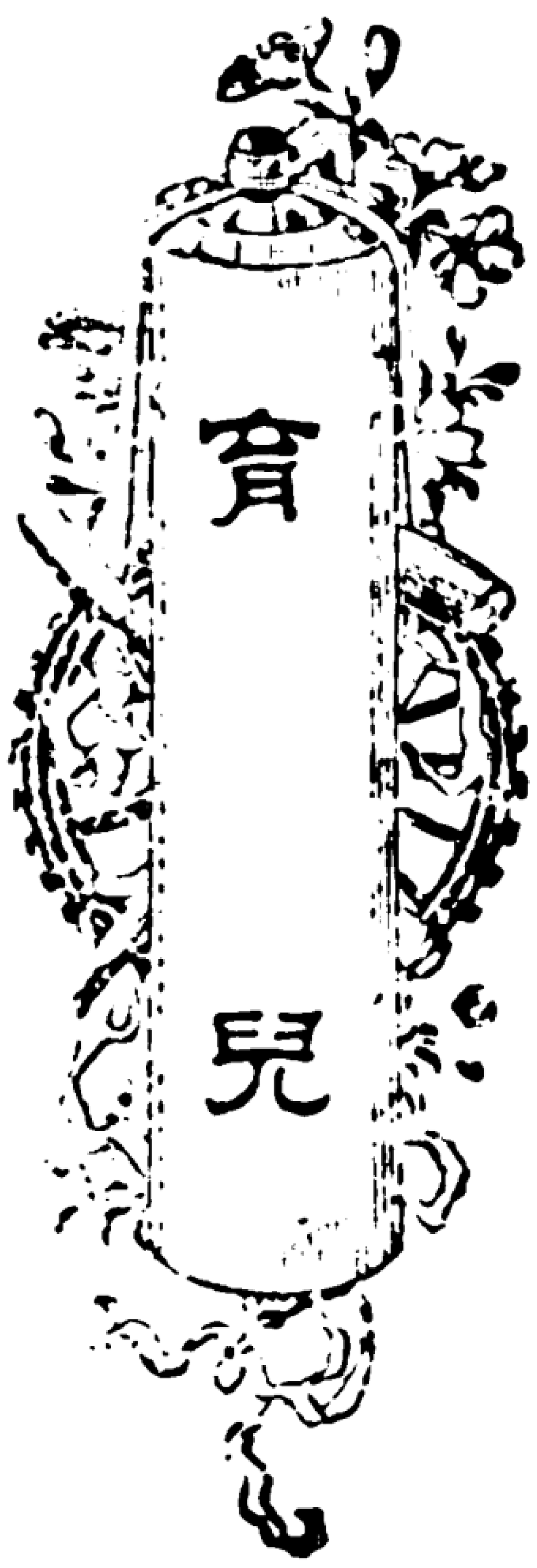
が增して來ます、是れは溫熱發散の增加するが爲めに多量の食餌を攝取する結果として起つて來るのであります、即ち此場合に於ても血液を製造する器關の作用が刺戟せられて、そうして赤血球が殖えるのであると、斯ういふ說をして居る學者があります、

肺結核は高地では極めて稀であります、それで適當な設備のある高地に居るときは、肺結核の治療には極めて有効であります、その外高地では虎列拉マラリア、のやうな傳染病もありませぬ、

要するに高地と海邊とは、其風土上の關係から種々な病氣を治療する上に應用せられて居るのでありまして、高地なり海邊なりの風土は或種の病に向つては大なる治療の効力を持つて居るものであります、是れは醫學に於て、特に氣候療法といふ一題目の下で攻究して居る事柄であります、

以上御話し申しました丈けて、空氣の事は止めまして、是から水に就いて申します、

（以下次號）



小兒の發育（第二百十二號の續き）

S. N. 生君

（二）初衣

此前には初湯のことを申上げましたが、之から少しく初衣のことに就て述べて見たひと思ひます。

小兒が生れて四十八時間經て、初湯も無事に濟んで仕舞へば、其次に來るべき問題は初衣のことであります。元來人の衣服はその體溫を保持させて、寒さを防ぐと云ふことが第一の目的であります、初生兒の初衣も亦此目的に外ならないのでありまして、小兒が生れて初湯がすめば、日本でも支那でも西洋でもすべて直に初衣を着せる、その初衣たるや西洋

ては柔かなフランネルの衣に帶を緩くしめさせる、日本では亦柔かい布、特にうこん粉で黄に染めた晒木綿を多く用ゐ、それで仕立てたゆきもたけも非常に長ひ衣を着せて矢張り緩くひもで帶を致します。之は昔からの習慣でも有るし、又その爲めに今日迄甚だしい害も認められても居りません、特に出產と云ふことは日本は勿論、支那朝鮮西洋各國でも實に非常の御目出度事の一で、古來初衣の外に出產を祝すべき色々の儀式も六ケ敷く、色々の習慣も之に附隨してあることでありますから、強て今急に之を改めると云ふ程の必要も有りますまいが、吾輩をして強て所存を語ることを許さるゝならば、私は生れて一週間乃至十日間は初衣の代りに柔かな毛布の如き布に小兒を捲ておくのが最も適當の事だろうと思ひます。その布は三尺四方位い毛布で、その毛布の一つの隅に小兒の頭を置き、反對の隅に足が來る樣にして、仰向に臥かし、殘る二隅を胸や腹の邊に捲き付けてピンで止めておくのです。かくすれば豆腐の樣な柔かな小兒の胸や腹を帶てしめたり、又衣服を着せる時に不注意の褓母や父親が柔かな小兒の腕や肩を強く摑で痛めると云ふ危險もなく、且つ不器用な父や褓母がその小兒の位置を換たりする時にも取扱に頗る便利で、甚だ面白い思付であろうと思ひます。且つそれで衣服の目的にも適ひ衞生上から見ても聊か非難のない事であると思ひます。

然しながら生れてから一週間か十日を過ぐれば、是非其衣服の心配を致さねばなりません。然らばその衣服は如何樣に調製べきか、如何なる品にて作るべきかと云ふことは亦實に必要の問題であります。衣服を着せるに付て第一に考へねばならぬ事は、體溫保存と、呼吸の事であります。

體溫保護と云ふ事に就ては、別に六ケ敷言はずとも明でありましよう。その衣服の質は柔かで、溫かくて、輕いものであれば好いのであります。例へば綿、フランネルの類であります。特にカントンフランネルは洗濯もよくきゝ、又柔かて至極適當て

あります。

凡て衣服を調製するに當ては、胸や腹を絞る樣な仕立方は一切よろしくありません。例へば凡べて小兒の衣服を腰や胸腹の周圍にひもてしめて、衣服のズリ落るのを防ぐと云ふ仕立方は一切不可なりと云ふのであります。腹や胸は決して緊めないで、充分に呼吸をさせねばなりません、初生兒の體は非常に柔かでありますから、少しでも壓迫すれば直ちに呼吸に障害を來すものであります、夫故にたとへ強く、緊めずとも、腹に帶を卷く事は避るが好い。帶で止めずに只前の廣がらぬ樣に、横の所でひもて輕く結ぶ樣にするのが好い。又衣服の目方は出來るだけ輕くすべく、その程度はフランネルの綿入一枚と、肌襦袢一枚位で、その綿入の丈は三十六吋（肩より以下）を超すべからずと云ふのが通例です。

頭巾は柔かなものを用ゐて作るのがよい、之によりて寒さを防ぎ、又柔かい頭に傷を生ずるのを防ぐ一つの方便となります。

之等の衣服が小兒の大小便で汚れる時は直ちに取り換へて乾燥させねば成りません、汚てゐるもの濕れてゐる物は、却て小兒の體を冷やす恐があつて極めて有害であります。而して之等の汚物や、濕物に、小兒を寢かす室で乾燥させるとは禁物であります。何となれば初生兒に最も緊要な事は、空氣の流通が好いと云ふことて、初生兒の第一の食物は酸素であるからであります、その酸素は空氣中より呼吸に因りて體内に入るものでありますから、小兒の居る室の空氣は清淨なる程小兒の食物を多く含有し、從て小兒の營養をよくする譯であります。

靴下又は足袋をはかせる頃になれば、その靴下又は足袋も必ずよくその兒の足に合ふものでなくてはなりません。他人よりの贈物で澤山あるから、少し位小さくとも、強て用ゐるなど云ふことは、折々見聞する所であるが、之は決して良くないことであります。小兒の柔かな發達の盛な足に、無理に小さい靴下や足袋をはかせるのは甚だ害のあることで、そ

の發達を妨げるのみならず、足の變形を來す恐があり、時にはその無理な足袋て摩擦されて滑傷を生ずることさへあります。

漸々成長し、誕生も無事に過ぎて、そろ〳〵歩く樣になれば、靴か草履の用意が必用になります、初めの中は特に靴がよいと思ますが、その靴も亦よく〳〵注意しなければ思はぬ害を來すことが有ります。靴の形、大さ等は色々あり、又小兒の足の形、大さによりても色々異りますから、一概に申されませんが、靴の長いのは不可と思ひます。足首の伸縮の運動を妨げる恐があるからてあります。靴の裏には柔かな鞣皮を敷て置かないと、足の裏を痛めることがあります。

步ける樣になれば、充分に步かして、小兒をして自働的に筋肉の發達を計らせるのは勿論ですが、他働的にも亦その手足のマッサージーなどをして筋肉の發達を促がすことは强ち無益のこともありません。

終りに一言附加たい事は、靴や靴下を作るに小兒の足の裏に油を塗り、これを布に押し付けてその形をとり、母はその形に從て靴下を編み、靴は其の形に從て靴屋に注文するのが最も適當な方法であります。一般に小さ過ぎると云ふよりは、寧ろ大きすぎるのが、小兒が着ける衣服並に附屬品の有すべき主要なる點てあります。



質疑

●問　秋氣相催し候處貴會益御多幸奉賀候陳は醫學日進步の今日なるも未た肺結核病に完全したる藥品無之由然らは肺患に罹りし者は藥を用ふる必要なきものと被考候若しあるとせば如何

なる藥を持長仕候て宜く候哉又肺患となれは大抵肺結核と病症同じきか序に伺上候間何卒右件々御教示被下度偏に奉願上候

山形縣北郡宮澤村　河部　蕭

●答　御申越の如く肺結核に完全の特効藥がないと云ふのは其の病症の高度に進んだものに對して云ふことで啻に肺結核のみならず如何たる病氣でも重症に陷つたものには名醫の治療も高貴の藥品も効驗を全ふすることが出來ませんが殊に肺結核病に於て甚だしいと云ふのみでありまして肺結核でも其の手當の時機を逸せずに初期に當つて適當の攝生と完全の醫療を加へなば全治し得ることは是迄醫家の實驗に徵して明かなる事實でありますが俗間多くは肺病と云へば直ちに死の宣告でも受けたかの如くに考へ却て攝生及醫療を等閑に附する樣な傾きあるのは誠に歎はしい次第で吾人の實に遺憾とする處であります、要するに肺結核は其最も初期に於て充分の攝生を守り醫士の治療を怠らざれば全治し得べきことは疑ひなきことであります、本病の治療劑としては內服、外用、吸入、注射等甚だ多般なれども何れも疾病の時機程度に從ひ適當の方法に依つて使用するものなれば是非醫士の診療を乞はねばならぬ故に一々名稱を揭ぐることを省きます、攝生方は云ふ迄もなく一擧一動衞生上に注意の滋養性食餌を攝取し（例之ば牛肉、牛乳、鷄卵、スープ、豆腐、豆の類及び新鮮の野菜少量の純葡萄酒等の如き）室內の換氣法寢具の日光曝露并に身體の冷水摩擦野外の散步娛樂的遊戲等で猶ほ肝油スコット乳菓は持長して用ふれば屢々特異の効を奏するものであります、又肺患とは肺結核症のみに拘はらず肺臟の諸疾患總てを稱して云ふことであります、就ては本誌（九月發行第二百十二號所載の家庭衞生）欄「肺結核の自宅看病」を參照せられたし



雜報

○聖上の御慈愛

今回東宮殿下の韓國行啓に就ては内地とは事かはりて氣候風土の異りたる海外に渡らせらるゝ事なれば畏くも　聖上陛下に於かせられては深く大御心を勞せさせ給ひ豫て韓國の醫事衛生に通曉せる御用掛醫學博士佐藤進氏に特に殿下の供奉仰せ付けられ彼地の氣候温度や健康上の事に就て親しく御下問ありしかば博士は　陛下の周到なる御注意に深く感佩し所感を奏上しまつりしも　陛下には尚も御軫念遊されて電報もて統監府に問合はすべきやう御沙汰ありしより博士は直に統監府へ照會したる上其委しき返電を奏上したるに　陛下は御手づから其電文を取りて御覽遊ばされ初めて叡慮を安んじ給ひけるものから切に東宮殿下の御身の上を案ぜさせたまふ難有き大御心はそれにても尚飽かずや思召しけん遂に博士を先發せしめて韓國現下の氣候衛生等の狀態を實地に踏査して奏上すべきやう仰せ付けられし程に博士は恐れ畏みて去月廿六日伊藤統監と共に同地へ向けて出發したるが多くの供奉員中御聖意を含みて先發せしは博士のみ且つ醫師として供奉仰せ付けらるゝは侍醫局員に限られしを斯く同博士に御沙汰ありしは　陛下の大御心に出でし事にて先例なきことなりと承はる、博士の光榮は記するまでもなく難有きは　聖上の御慈愛にこそ

○衛生事務講習所證書授與式

大日本私立衛生會第十二回衛生事務講習所講習證書授與式は去月三十日午後一時より日本橋區坂本町東京醫會本部に於て擧行せり今回の卒業生は各府縣警部巡査郡書記其他市町村吏員等五十名にして先づ北里副會頭開會の挨拶並に告辭を述べて講習生に證書を授與せられ次て横手博士（講師總代）窪田衛生局

長、柴山博士の演說、講習生總代栗本欣一氏の謝辭あり之にて北里副會頭閉會を告け夫より別室に於て茶菓の饗應及び撮影ありて散會せしは三時頃なりき

○東京市の告諭

去月十七日東京市告諭を以て腦脊髓膜炎に關し大概左の注意を與へたり本病は一種の黴菌を咽頭鼻腔に繁殖し遂て頭內に侵入し炎症を起すものにて萬一本病にかゝるや死に至らざるも手足麻痺精神痴鈍となり甚しきは失明するものあり依りて左の諸點に注意すべし

一、此病に感染したるものは頭痛惡寒發熱し一日內に精神を侵し譫語し又は人事不省となり搐搦を來し四五日より熱降り精神舊に復するものあるも四週間以上に亘て死に至るものあり

二、此病の豫防法は同患者に近寄らずが第一にて若し子供など此病にかゝれば世人と隔離するを要し次には感冒にかゝらぬ樣注意すべし

三、下宿、寄宿舍、工場、雇人多き家などは出入の人に注意し平生室內を掃き日光の透射空氣の流通に注意し頭痛の激しきときは速かに診斷を受くべし

四、一家內に患者生したるときは速かに入浴せしむるべし止むを得ざれば一室を離隔すべし

五、病家にては醫師の示す消毒法を施さねばならぬ又鼻紙、手巾、食器等は熱湯を注ぐべし

六、夜具衣服等は區役所へ依賴して消毒所に持行くべし

七、患者室の疊及び障子、壁等石炭酸水にて消毒するか日光に曝すべし

○恐るべき流行病

去る八月初めて發せる腦脊髓膜炎は其後獨り東京のみならず福井橫濱等にも發生し爲めに警視廳は廳令を發して豫防及警戒上の注意をなすに至りたるが本病は其症狀其他單に腦に關する諸病と酷似せる場合多き爲め專門家と雖も其判斷に苦しみ眞症ならざるものを眞症とする場合若しくは眞症を眞症ならず

とする場合等あるより廳令を以て屆け出しむべき方法を執るに至りても實際の發生統計を得るは今の處到底覺束なきよしなるが今初發以來警視廳に屆出たるもの及び死體檢案に依り發見したるもの丶總數は百十九名にして其區分は左の如くなりと

▲八月(初發以來卅一日に終る迄)

淺草	一八	洲崎	四	淺草	一〇
本所	四	芝	三	深川	三
日本橋	三	下谷	二	麻布	一
赤坂	一	神田	一	麹町	一

▲九月(十日以降各署に屆出て未着)

淺草	十五	神田	五	本所	四
日本橋	六	小石川	七	芝	二
深川	九	麹町	八	麻布	四
下谷	三	日本橋	二	赤坂	一
新宿	二				

尚九月即ち先月分は屆出未着にして各管内の發生數不詳なるが本表は重に屍體檢案の際腦膜炎、腦エンポリー、腦充血等の診斷書を有するもの丶内腦脊髓膜炎と認むべきものを計上したるものなりと

○同仁會へ御下賜金

大隈伯を會長とする同仁會は創立六ケ年となり其事業の社會を益せし事の多き趣畏くも上聞に達し去月廿五日宮内大臣より大隈會長へ　陛下の思召を以ての御下賜金なれば廿六日出頭せらるべしとの通達ありしかば同會理事山田烈盛氏大隈伯の代理として同日午前十一時宮中へ參内し御下賜金五千圓を拜受したり偖同仁會にては今回帝室より　御下賜金を拜受したるに就て同會の來歴を聞くに去三十五年六月十六日有志組織にて成立したるものにて是より先日清戰爭後及び清韓經營論の興るに伴ひ醫事衞生の方面より隣邦の啓發に從はんと企望するにありて其後數年同文醫會なるもの我が醫師社會の一部に組織せられ次で三十五年亞細亞醫會の起るに及び同文醫會亦之に合し竟に同仁會なる名稱の下に一個の團體を組織せんとの計畫起り同年六月十六日華族會館に其發起總會を開き故長岡護美子を會長醫學博士片山國嘉氏を副會長に醫學博士岡田和一郎、藤井綏一、園田宗義、細野順、石川清忠、足立忠八郎、川上昌保

の諸氏を理事に選定し故近衞公の如き亦當時大に力を同會の成立に盡されしが是れ世に現はれたる第一經路にして越えて三十六年二月四日改めて財團法人の組織と爲し以て今日に至りしなり其設立の目的は清韓其他亞細亞諸國に向て醫學藥學及び之に隨伴する技術を普及せしめんため彼の地民衆の健康を保護し病苦を救濟すると同時に併せて彼の地在留の我同胞及び各國の人衆にも及ぼす　趣旨にて今や同會の事業は內地は勿論清韓兩國に於て著しく進捗し韓國には大邱平壤の二ヶ所に、清國は營口、安東縣に病院を設立し又韓國の鐵道衞生設備に關しては多數の囑托醫を派遣し殊に本年に於て既に派遣したる警務顧問醫八十餘名に達し從來の派遣員を合して前後三百餘名の多きに至れり尙一方同仁會醫學校を設立して清韓留學生の研究に資せしめ公益的事業として其効果多大なるものと認められ斯くは御下賜金の光榮を荷へるに至りたる次第なりと云ふ

又同仁會にては會務の擴張に伴ひ二名の副會長を置くことゝなり去月二十八日の理事會に於て現副會長佐藤進博士の外更に藥學博士丹波敬三氏を推薦囑托せり

○癩病者療養所費の確定

東京に設けらるべき癩病者療養所の建築及初度調辨費は左の如く確定せり

四十年度支出の分

九萬四千三百六十四圓九十錢	建築費
五千圓	初度調辨費

四十一年度支出の分

二萬九千七百四十八圓九十錢	建築費
一萬二千百八十九圓	初度調辨費

○海外の貧民救助病院

本月四日午後二時日本赤十字社に於て特志看護婦會の總會を開き、總裁閑院宮妃、東伏見宮妃、伏見若宮妃、久邇宮妃、梨本宮妃の五殿下を始め奉り會長鍋島侯夫人及び鍋島侯、德川侯夫人(家達)三條公夫人、松方侯夫人、德川侯夫人、副會長千家男夫人外貴婦人八十四名出席日本赤十字社理事男爵小澤

武雄氏の講話ありたるが其要旨下の如し『私は主として英國に於ける第八回萬國赤十字社大會へ參りたる報告をなしたいと思ひます米國で大統領のルーズベルト氏と會見した時氏の言はれますには日本赤十字社は日露戰爭で大に其手腕を發揮し戰後未だ創痍癒えざるに早くも我桑港の大震災に際し四十萬圓を送附し呉られたるは洵に其手腕の侮るべからざるものを示して余は敬服すると同時に日本赤十字社の厚意に對し米國民を代表して大いに感謝致します、が單に非常の時に於て其手腕を發揮せらるゝ許りでなく平時に於ても亦同樣大いに其効果を擧げらるゝに至らんことを希望すると申されましたが現に瑞西も英國も此方面に甚だ熱心に盡力して居られる樣でムいます大會に於ても各國の委員が皆一齊に之を唱道致しました、英國のトーマス病院と云ふは同國第一の大病院で千二百有餘人の患者を收容して居て院中のナイチンゲル、ホームと云ふは博愛の權化ナイチンゲール孃の創意に係り孃自身管理し居られましたが孃の甥に當る紳士が管理して居られます之は慈善病院で患者は多く貧民が目的ですが資產ある者も相當の藥價を拂つて治療を受くることもあり或は又中には身分を詐つて施療を受ける吝嗇漢もないではないが是等は自ら其人の公德心に訴へることゝ致して居ります兎に角此貧民救助病院は平時の婦人事業の尤なるもので何うか我國に於ても此種の事業が皆樣の手に依つて實行せらるゝに至らんことを切望致します歐米では慈善事業即ち婦人事業、婦人事業即ち慈善事業と云ふ風で獨佛亦皆然るのであります云々』とのことなり

○虎列剌累年比較表

東京府下に於けるコレラ病患者は去る九月二十五日横濱より輸入されし以來十月十日までに總て十九人(郡四、市十五)あり内十二人(郡三、市九)死亡し七人治療中なるが今回東京市に於て調査したるコレラ患者累年比較表を示せば左の如し因に本表は二十二年迄は市郡を區別せず又去る卅五六年以來は絕て

發生せざりしなり

年次		患者	全治	死亡
十六年	市郡	七八	四九	二九
十七年	市郡	六六	三三	三三
十八年	市郡	二四七	八七	一六〇
十九年	市郡	二、一七六	二、一三四	一〇、〇四二
二十年	市郡	八二	三八	四四
廿一年	市郡	六三	三六	二七
廿二年	市郡	三六	一九	一七
廿三年	市	五、四八七	六三四	二、八五九
	郡	五〇二	八二	四二〇
廿四年	市	二七六	八〇	一九六
	郡	三五	七	二八
廿五年	市	六四	二九	三五
	郡	七	四	三
廿六年	市	二四	一二	一二
	郡	五	三	二
廿七年	市	一〇	八	二
	郡	四	三	一
廿八年	市	二、八九七	五九七	二、三〇〇
	郡	一三〇	九四	三六
廿九年	市	二六八	一七五	九三
	郡	四〇	二	九
三十年	市	九三	四七	四六
	郡	二	一〇	二
卅一年	市	六三	四一	三
	郡	三	七	三
卅二年	市	四三	三五	三三
	郡	八	二	六
卅三年	市	七	一	六
	郡	一	―	一
卅四年	市	三	―	三
	郡	二	一	一
卅五年	市	五	―	五
	郡	―	―	一

○自殺の種類

統計の大家呉文聰氏は近刊の國家醫學會雜誌上に「自殺論」を掲げ、總論の一節に「吾人は科學的研究によりて、社會の現象に於ける一定の關係を發見せんと欲するものなり、其の關係にして果して常に一致を保ち永繼續するものとせば之を規則と云ひ又は法と云ふを得べく、若し其の原因を發見してこれに依つて人力を以て、其の一部分だも司配することを得ば是れ即ち學問上多大の勝利なりとすべし」云々又其の結論として左の十二條を擧げたり

第一、自殺の整齊せること

第二、國民中自殺氣質のものありて普通人よりヨリ多く自殺の傾向を有すること

第三、自殺男女の割合は大略男六分、女四分なること。

第四、本邦は諸外國に比し自殺の割合稍饒多なること

第五、自殺の近年次第に增加すること

第六、男に比し女の自殺の增加稍急速なる事

第七、十六歳乃至二十歳の男子の自殺增加特に急疾なること

第八、精神病及び各種避く可からざる不幸にあらずして、言行の不謹愼又は情慾の發動の爲、或は訓戒叱責程度に過ぎ、又は嫌忌を强ゆる等のことよりして人を死地に陷るゝこと亦決して少からざること

第九、地方により自殺の割合に多少あり

第十、氣候の溫暖は萬物に其影響を及ぼすものにして、自殺の如き晩春より漸く其數加はり、初秋に達して初めて減少す、其影響極めて明白なり

第十一、自殺の方法としては、縊るゝもの過半入水するもの三分の一弱、十中八九は此二者に出づ、男には縊るゝもの多く女には入水するもの多し

第十二、自殺の半數は精神錯亂にして、三分の一弱は活計困難、薄命悲歎及病苦に困る、其他父母舅姑、無情なる男子、過嚴なる主人の爲此に至るもの亦少からず

○東京心性學館の設立

近來歐米に於ける生理の研究は益々歩を進むると共に心理研究の道も亦著しき革新を來しゴール博士の腦皮質局部作用說の如き大に學者の注目を惹起し獨逸エッケル博士の如きは是れを目して二十世紀生理學上の最大問題と爲し是れが解決は心理學上の一大革新を招致す可しと論ぜし程なるが曾て倫敦の大倉組支店長たりし高橋邦三氏は滯英中大に斯學に趣味を感じ支店長の俸給一切を抛つて斯道の研究に從事し多年專心の實驗に依つて漸やく其蘊奧を極めたれば今回井上、渡邊、辰野、野村の諸博士石黑、岡部土方、副島の諸華族他數十氏の贊助を得て赤坂中の町二十一番地に東京心性學館を設立し廣く希望者の依賴に應じ最新腦皮質局部作用の學理に據つて各人の骨相並に性情を鑑別し大に人事改善の途に適用

する由

○細民病者の福音

淺草區榮久町の大日本救療院は高山喜内氏の首唱にて已に創立後十年に達し專ら下谷淺草を始め本所深川方面の細民病者を救療し各區役所警察署などより差向けらるゝものも多く此頃は隔日二百餘人の病者を救ひ居れるが是迄は只病氣治療のみにて死亡せしものには何等の救濟方法もあらざりしを今度同會願問の醫科大學解剖主任小金井博士に交渉し同院の手に救療されたる細民にして若し死亡したる時は直に醫科大學に引渡して解剖を請ひ大學より祭資料を得て死者の靈魂を懇ろに吊ふ方法を講じ去六月より實行し居る由既に大學にて解剖に附したる死體は三十餘に達したるが細民も是迄の如く死亡者に對しても心に濟まぬ吊ひをなすより例令死體は解剖に附せらるゝとも醫學上にも貢獻し且は後々の吊ひ迄もなし得らるゝ事とて進んで請ふ者多く非常の好結果を收めつゝありと云ふ

○俳優の壽命

俳優の壽命は凡幾許を數ふべきか劇道隆盛の昨今頗る趣味ある話柄と思へる儘明治の初年死亡したる六代目河原崎權之助より近く死亡せし中村銀之助に至る一百四人の物故俳優に就て綿密なる統計を取りたるに實に左の如き結果を收むるを得たりとて近頃の東京每日新聞に見へたり

十四才以上三人▲二十才以上九人▲三十才以上十人▲四十才以上二十八人▲五十才以上十七人▲六十才以上十人▲七十才以上七十八才迄五人▲不詳三十人

右一百四人の內不詳三十人を減じたる七十四人の總年齡三千四百卅八の平均四十六歲四なる數は實に明治の俳優ありて以來の平均死亡年齡なり而して明治十四年十四歲にて夭折せる澤村源平が最年少者にして十九年七十八歲にて逝きたる中村仲藏が最年長者に當れるなり此一百四人の俳優が一年中如何なる月割に死亡せるかを見るに

一月	六	二月	一二	三月	七
四月	九	五月	六	六月	一〇
七月	一三	八月	一一	九月	九

十月 九　十一月 五　十二月 七

即ち夏季より秋季にかけて多く寒冬の兩季に於て少なきは一寸研究すべき價値あらん尚ほ此四十年間に團十郎と菊五郎の死亡せし卅六年及び壽美藏、市藏等の死亡せし卅九年は何れも九名宛死亡し居れるが此中殊も著名にして明治の演劇史を飾るべき俳優は先づ左記の廿一名に過ぎざらんか

△三世關三十郎明治　二年……六十六歳
△市川團藏同　三年……七十二歳
△市村白猿同　七年……四十二歳
△阪東彦三郎同　十年……四十六歳
△澤村田之助同　十一年……三十四歳
△岩井半四郎同　十四年……五十四歳
△助高屋高助同　十九年……四十九歳
△市川海老藏同　十九年……四十二歳
△中村仲藏同　十九年……七十八歳
△關三十郎同　廿二年……
△阪東家橘同　廿六年……
△市川新藏同　三十年……三十七歳
△尾上菊之助同　三十年……三十歳
△助高屋小傳次同三十二年……十六歳
△阪東秀調同三十二年……五十五歳
△尾上菊五郎同三十六年……六十歳
△市川團十郎同三十六年……六十六歳
△市川權十郎同三十七年……五十七歳
△市川左團次同三十七年……六十三歳
△片岡市藏同三十九年……五十六歳
△市川壽美藏同三十九年……六十二歳

大日本婦人衛生會記事

○本會十月例會

本月五日(土曜日)午後二時より神田一ッ橋通り女子職業學校内に於て例會を開き、當日は豫て富士ドクトルの講話ある筈なりしも俄に事故のため缺席されしは遺憾なりし曾て韓國平壤に滞在せられし堀内文次郎君は「韓國婦人の衛生に就て」と題し先づ自製の滑稽圖書を掲げ韓國男女の體格と日本國男女の體格を比較對照して其國體に及ぼす影響と其國の風俗習慣等を列擧して衛生上に關する事柄を統計に徴して(此間韓國の風俗其他の寫眞十數枚の供覽あり)面白可笑く興味ある講演ありし、傍聽者　約百五十餘名にして中々の盛會なりしが同四時半頃閉會せり、此日出席せられし役員は左の如し

濱尾作子　鳩山春子　長谷川仲子
片山龜子　岡田德子　岡山とし子

三浦敎子　羽田三緒子　田村きよ子
山口良子　丹波さだ子　岩下ゆか子
吉武輝枝子　小川幸子　高木錠子
松平芳子　岸澄子　の諸氏（以上出席順）

新潟支會

○九月例會

去月廿九日午後一時より新潟婦人教育會と聯合の上新潟師範學校附屬小學校に於て例會を開き出席者約四十餘名にして講師及び演題は左の如し

一赤痢病の豫防　女醫 富山やす子

一日用器具の取扱ひ方　新潟高等女學校教諭 北村きい子

○本會入會者

○事務所申込
●牛込區原町二ノ七一　通常會員 馬屋原つる子
●長野縣小縣郡丸子村　通常會員 小林りつ子
●越前國敦賀港富貴　通常會員 矢島よね子
●神田區紺屋町　通常會員 神すゑ子
●福島縣信夫郡瀨上町　贊成會員 鈴木一衞

○阿部恒子紹介
●北海道札幌區北七、西六　通常會員 國澤蝶子
●北海道札幌區北二、東一　通常會員 米倉芳子

○小川孝子紹介
●京橋區南新堀町一ノ六　通常會員 牧原鶴子

○關野秀子紹介
●山口縣豐浦郡西市村西市病院　通常會員 小林市子

○瀨川さわ子紹介
●秋田縣雄勝郡貝澤村　通常會員 中川房子

○吉富しも子紹介
●隱岐國西郷町第一號官舍　通常會員 伊垣かう子

○日下部政子紹介
●麴町區飯田町四ノ十三　通常會員 地口なかの子

○山形支會入會者

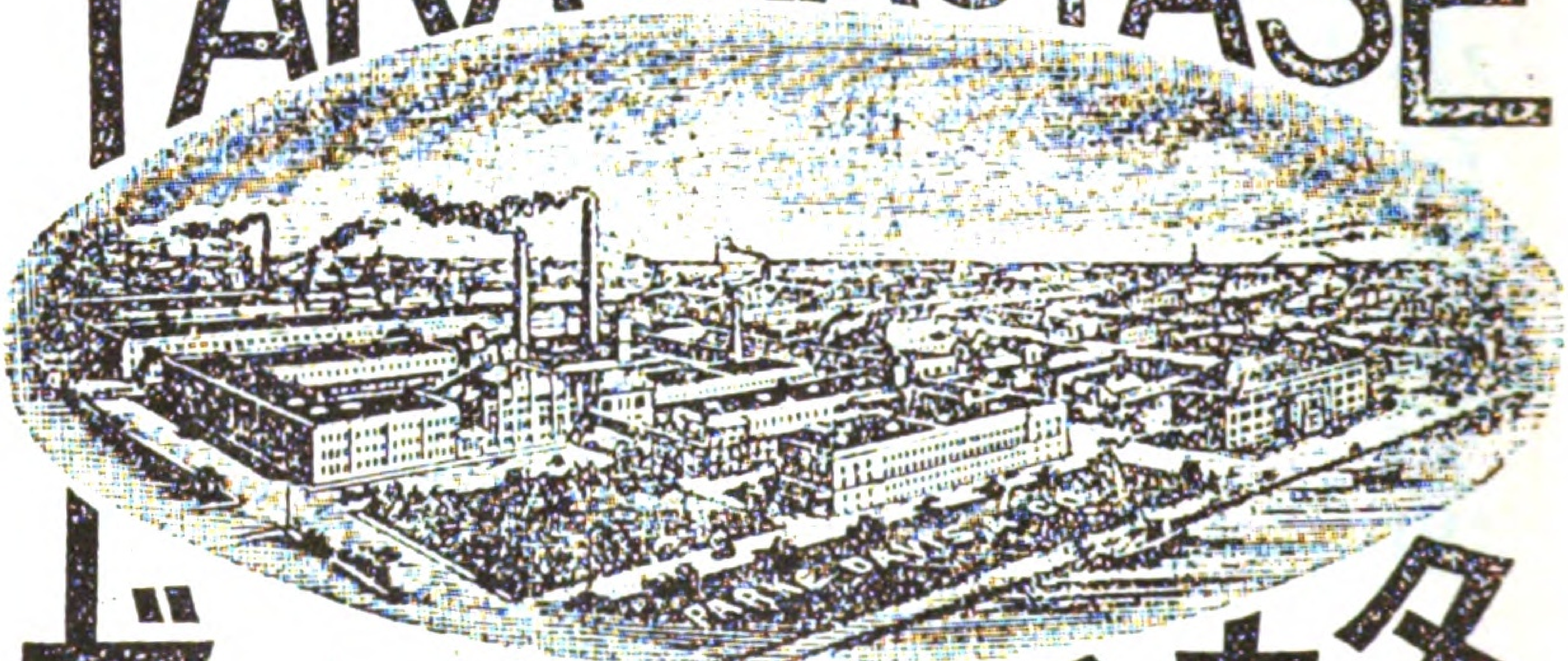
○佐柳幹事紹介
●山形市　特別會員 萩榮子

○友田君紹介
●山形市　通常會員 常世とめ子

○轉居

●臺灣臺北南門外龍迷口庄民政部官舍へ　山田よれ子
●滿洲大連南滿洲鐵道株式會社々宅服部直樹方へ　服部鎮子
●淸國北京化石橋岩谷博士方へ　勅使河原君惠子
●牛込區仲ノ町八へ　森亮子
●淺草區東仲町二十三へ　中島照子
●芝公園八號地常照院內へ　村田哲子
●府下千駄ケ谷原宿一七四へ　內山訓子
●本所區小泉町三五へ　五十嵐つれ子
●芝區白金三光町三五七へ　山地謙子
●本鄕區駒込千駄木林町一五七へ　古澤みれ子
●府下入新井村字山王二六八三へ　岡富子
●麻布區市兵衞町二ノ八九へ　芦田操子
●深川區冬木町六へ　鈴木千枝子
●神田區駿河臺濱田病院內へ　高久はる子

TAKA-DIASTASE



タカヂアスターゼ

世界最大の製藥工場

パークデビス社は完全なる設備を有する世界最大の製藥會社にして、上圖は其デトロイトに於ける本社工場の全景なり。此他同社は加奈陀及英國に同一規摸の分工場を有し、世界の醫家が要求せらるゝ總ての醫藥品を製造す。タカヂアスターゼはパークデビス社の製品なり。完備せる裝置の下に熟練なる技術者に依り、製出せらるゝ

高峯氏發見消化新劑

本劑は品質純良、毎瓶强度均一にして、又其效力永久不變なり。醫師及藥舖諸彥！模造品製造者の誇大なる虛僞的廣告に誤らるゝ勿れ、世上本劑以上の實品なきは歐米及吾多數醫學大家の實驗報告に徵し確認せらるべし、需用者は必らず高峯氏タカヂアスターゼと指定せられよ、本劑は粉末錠劑水劑の三種として發賣せり各地藥舖にて販賣す

代理店 東京南茅場町 三共藥品合資會社

廣告

獨逸大學教授
「ソキスレット」氏滋養糖

此品は乳兒に用ゆる牛乳に加入する砂糖の代用品として製造せられたる、一般砂糖の如く胃腸に障る事なく、消化せられ易き、糖の一種にて歐洲大學小兒科はもとより、小兒科專門醫の稱用する無類の滋養品なり

幸に今回當店に着荷致し候間御試用の程願上候

神田美土代町四丁目五番地（小川町電車停留所前）

藥舖　和光堂

（電話本局一六四八）

外に
「タインハルト」
小兒滋養品

大人用滋養品
ヒギアマ　共新荷着致候

私立大日本婦人衛生會

新潟支會規則

●第一條 本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり●第二條 當支會の會費は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓特別會員毎月金參拾錢通常會員仝金貳拾錢支會員甲毎月金拾錢乙仝金五錢●第三條 入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし●第四條 會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衛生雜誌を配布す●第五條 會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善資金とす●第六條 支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長は副會長總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす●第七條 支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演說をなすべし●第八條 毎年一月總會を開き支會の要務を執行す●第九條 本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし●第十條 天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時物品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は贊成員となすべし●第十一條 一般慈善事業の贊助天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす●第十二條 支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし●第十三條 特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

明治廿九年四月創立

事務所新潟市本町通十三番戸中村しげ子方

新潟支會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





●本會徽章料左の如し

●通常會員章
第三號
メッキ製拾貳錢、送費六錢

●第二號
正銀製四拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章
第一號
七拾錢（黑塗箱入送費九錢）
六拾錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料をも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在ハ郵便局（東京牛込築土八幡町郵便局）宛振出あるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈

廣告料　一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之

本誌一部定價貳拾錢

東京市牛込區上宮比町八番地
發行所　私立大日本婦人衛生會
（振替貯金口座一〇六〇〇番）

東京市下谷區竹町五番地
編輯兼發行者　齋藤渇之丞

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　飯田三千太郎

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

明治四十年十月十六日印刷
仝年十月二十日發行（毎月一回二十日發行）
婦人衛生雜誌第二百十九號